



心の歌を奏でて

—序章— ③

芳田尚哉

さらに夜通し走って、ようやく翌朝、目的地に到着した。

俺たちは車で寝たけど、椎崎さんは徹夜だよな。ホントに、タフすぎるだろ。安全運転をしてくれた事に感謝だよな。

でもって、目の前には巨大なビルが。

綺麗な外観で、天まで届くんじゃないかってくらいだ。

「よし、到着だ」

車を駐車スペースに停めて、椎崎さんは車を降りる。そして大きく伸びをして、大きな欠伸をした。

そりゃ、疲れたし眠いだろう。

「ありがとうございました」

「ん？」

車から降りて、お礼を言った俺を不思議そうに見る。

「別に礼を言われるような事はなかったと思うが？」

「夜通し運転して……」

「ああ、それか。まあ、俺だけでも同じ事だろ。君らがいてくれて、むしろ飯が楽しかったからな。ありがとな」

そういう風に言われると、どうしていいのかわからなくなる。

「こういう時はな、素直に甘えてればいいんだよ。大人でもそうだ。子どもだからとか思って言ってるわけじゃない」

さらにそんな事まで。

「ありがとうございます」

そんな言葉に、椎崎さんは、ああとだけ頷いた。

「ん～、すごいね……」

キヨカは大きく伸びをして体をほぐす。

「ここが、あの神崎グループのビルなんだ」

高いビルを見上げる。世界に名だたる大企業。そのグループ本社のビルが目の前にある。

俺には、全く縁がないだろうと思っていた場所だ。つうか、想像すらしてなかった。

「さて、行くか」

椎崎さんは、自分の家にでも入るかのように、すたすたと歩いていく。

そりゃ、あの人なら何度も来てるから慣れてるんだろうな……。

しかし、その後を歩いているキヨカは……ブルブルと震えてやがる。生まれたての子鹿みたいだ。

それが面白い……と笑う余裕は俺にはない。だって、俺だって膝が笑っていて、まともに歩けそうにない。

「早く来いよ」

椎崎さんが急かす。

いやいや、行きたいけど無理です。

「ホントに、ここなん、です、よね」

さすがのキヨカも声が震えている。

わかる。わかるぞその気持ち。

「緊張するのはわからんでもないが、行ってみれば特になにもないぞ。……なんて言っても無理だろうな。俺も、初めての時はそんなだったよ」

この椎崎さんでもそうなんだ。そりゃ、それが普通の反応だろうな。

俺とキヨカは、なんとかビルの中に入っていく。今にも腰が抜けそうだ。

椎崎さんは、当たり前のように受付に向かう。

「すみません、宍神さんをお願いします」

そう言って、なにか緑色のカードを見せる。

なんだ、あれ？ 通行証か？

それを見た受付の女の人は、少し緊張したように電話を掛ける。

「すぐに参りますので、少々お待ちいただけますか」

「わかりました」

そう言って引き返すかどうかという頃に、エレベーターが到着してドアが開いた。

椎崎さんはそれがわかっていたかのようで、既に歩き始めていた。

「お待たせしました。お疲れさまでした」

「いえいえ、そちらは片付きましたか？」

「……なんとか。そちらの件が気になって、集中できないくらいでしたよ」

ピシッとしたスーツの女性と、なにやら親しそうに話している。誰なんだろう？

「その件に関しての詳細は……上に行ってからにしましょうか」

椎崎さんが俺たちを呼ぶ。

「とにかく行こう」

「そうですね」

二人がエレベーターに乗り込む。

俺たちも、慌てて乗り込む。

「蟲(ベステート)の件ですが、結局、逢稀に行って調べるしかなさそうです。とりあえず、今回の件を解決できるのは、この二人だけのようなので、連れてきました。璃織魚さんに、この二人の能力(ちから)を調べてもらいたいんです」

「わかりました」

じろりと……というつもりはないだろうし、実際にそうじゃないんだろうが、そういう視線に感じる。やたらと緊張する。

「この二人が、四護というわけですか」

「その辺も、璃織魚さんを交えて話しましょう」

「そうですね」

と、ちょうどエレベーターが止まった。

椎崎さんとスーツの女性が降りる。

置いてけぼりになるわけにはいかないの、それについていく。

「キヨカ、行くぞ」

「う、うん」

二人してガチガチに緊張してる。

最上階に来たみたいだけど、最上階だったら、普通が一番偉い人がいるんだよな。

エレベーターを降りた雰囲気も、なんだか普通の会社とは違うような気がする。まあ、学生だから、会社の内部なんて知らないけど。少なくとも、イメージとは違う。

「ほら、こっちだ」

「は、はい」

椎崎さんに呼ばれて、部屋の中に入る。

あまりに緊張していて、逆に油断していた。

「ようこそ」

若い女性の声だ。

ぱっと顔を上げる。

そこには、にこやかな笑みを浮かべた女の子がいた。俺たちと、そんなに違わないみたいだ。社長の娘さんなのかな？

「遠い所をわざわざ、お疲れさまでした。椎崎さんも、今回は急な事で、お忙しいところ、申し訳ありませんでした」

「いやいや、結局俺も望んでした事です。別に璃織魚さんの命令で.....なんてわけでもないですから」

「そうですか。それはありがとうございます」

なんだか、にこやかに普通の会話が繰り広げられていて、少し拍子抜けしてしまう。

「どうぞ、そちらにお掛け下さい」

いつの間にか、スーツの女性がグラスに入った麦茶を持ってきていて、それを部屋の真ん中のガラステーブルに置く。

「それじゃ、暑かったし、疲れたしで.....遠慮なく」

椎崎さんはソファにどかりと座ると、麦茶をグビグビと飲む。

「ぷはあっ、うまい」

「あのですね.....。大人として、もう少しお手本になるような行動をですね.....」

スーツの女性が、俺たちを見ながら言う。

「そうでした。でも、あまり畏まりすぎると、この二人が緊張しまくって、大変な事になるかもしれませんし。やっぱり、寛(くつろ)いで自然でいる方がいいでしょ」

「そういう考えもありますね。さあさ、二人もどうぞ」

「は、はい」

ビシッと背筋を正す。

「ひゃ、ひゃい」

キヨカは動揺しまくって、噛み噛みだ。

俺たちは、昔の武士のように、同じ方の手足を同時に出して歩いていく。

椎崎さんの隣に腰掛けると、ソファがずぶりと沈み込んで慌てる。なんだ、この柔らかさは。俺たちを迎えた女の子は、椎崎さんの向かいに座り、スーツの女性はその隣に座った。

「では、早速ですが、なにがあったのか報告していただけますか」

女の子が口火を切る。

「そうですね。この二人から……」

椎崎さんがこっちを見る。

俺たちは、緊張しまくって、説明なんてできそうにない。

「無理そうなので、俺からしましょう。ここに来るまでに聞いた内容ですが」

「それで構いません。どうであれ、ひとまず蟲(ベステート)の驚異は去っているという事でしょう」

「そうですね。これからが大変ですけど」

「……そうですか。それでは、その辺も考慮して、手短にお願いできますか」

「わかりました。手短に、できるだけ詳細にさせていただきます」

そう前置きして、椎崎さんが車の中で俺が話した事をまとめて話す。

「……なるほど、そういう事があったんですね」

女の子が俺たちを見る。

「椎崎さんの話ですと、まだ蟲(ベステート)は封印されていない、と」

深刻そうな表情で、顎に手を添える。

「そうですね。遠野氏の話では、あと一四の蟲(ベステート)が、あらゆる世界に散らばっているようです」

「他の世界にも影響が……」

「それをなんとかできるのは、この二人しかないでしょう」

「そうですね。そうなりますか。今回は、椎崎さんは動けないでしょうし、その四刀と門番(ポードイスト)を有するこのお二人が適任でしょう」

「そうなのですが、この二人はとりあえず『時の口』が見えましたので、時空(とき)の能力者であると思うのですが……」

「わかりました。詳しくどういう能力(ちから)があるのか調べてみましょう」

なんだか、俺たちの事なんだろうけど、俺たちは蚊帳(かや)の外っぽい。ちんぷんかんぷんのまま、話が進んでいく。

「お二人とも、こちらへ来ていただけますか」

女の子に手招きされる。

「ほれ、璃織魚さんの横に立って」

椎崎さんにせつつかれ、女の子の横に立つ。

キヨカは俺の隣に。

「今から、あなたたちの能力(ちから)について調べます。特に痛みや不快感はありません。そのまま、自然な状態で立っていて下さい」

女の子はそう言うと、数珠のようなものを取り出し、それを俺に近付ける。

一瞬、後ずさりしそうになるが、別に危険なものじゃない。それに、こんなのでビビってたら、完全にチキンじゃないか。

女の子は、俺に数珠を近付けたまま、ゆっくりと目を閉じる。

うわぁ……こうして、近くで見ると可愛いな。目を閉じても綺麗だし。

……って、なに考えてんだよ、俺。

しばらくそうして、今度はキヨカにも同じ事をする。

キヨカは緊張して、直立不動になっている。

「はい、ありがとうございます。どうぞ、座って下さい」

俺たちは、元の場所に戻って座る。

ふう～、緊張した。

いったい、なにをしたのかわからんけど、とにかく、これでなにかわかったんだよな。

それにしても、俺たちの能力(ちから)って……。

「璃織魚さん、この二人は……」

椎崎さんが身を乗り出すようにして訊く。俺たちよりも、この人の方が興味津々って感じだ。

「確かに、このお二人には能力(ちから)がありました」

椎崎さんが大きく頷く。

俺もごくりと唾を飲み込む。

なんだか、ドキドキしてきた。

だって、超能力みたいなもんだろ。

今まで、そういうのとは縁のない……っていうか、普通はないけどよ。

それが、そういうすごいのあるって言われたら、緊張するもんだろ。

「トールちゃん」

キヨカが服の裾を引っ張る。

「どうした？」

なんだか、ここで話すのはまずそうなので、自然と小声になる。

「緊張してきた」

なあんだ。そんな事か。

「俺もだ」

「うん」

キヨカが小さく頷く。

「それで、どんな能力(ちから)があったんですか？」

「はい。彼には `時空(とき)を遡る能力(ちから)、が、彼女には.....」

と、そこで言葉を濁す。

「璃織魚さん？」

「璃織魚様？」

椎崎さんとスーツの女性が同時に訊く。

なんだか、普通じゃなさそうだ。

どうしたんだ？

俺は `時空(とき)を遡(さかのぼ)る能力(ちから)、なんだよな。つうか、それってすごいよな。

で、キヨカだが.....。

ちらりとキヨカを見る。

「トールちゃん」

キヨカは今にも泣きそうで、ガタガタと震えている。

そりゃそうだろう。こんな意味深に言われたら、キヨカじゃなくてもこうなる。俺だったら、耐えられないかもしれない。思わず、掴みかかって問いつめるかもしれない。

「申し訳ありません。別に問題があるというわけではないのです」

女の子がぺこりと頭を下げる。

「なら、どうしたんですか？」

椎崎さんが訊く。この人がいてよかったと思う。この人が、こういう風に訊いてくれなかったら、俺たちはなにもできない。

「不安にさせてしまって、申し訳ありません」

女の子は、今度は俺たちに.....特にキヨカに向かって頭を下げる。

「あの.....わたしてって.....」

「申し訳ありません、ただとても珍しい能力(ちから)だったもので、自分でも確証が得られなかったのです」

何度目かの謝罪だ。

それにしても、珍しい能力(ちから)？

そもそも、こういう能力そのものが珍しいだろ。この人たちは、そういうのが身近だから別なのかもしれないけど、その人たちですら珍しいと思う能力(ちから)って.....。

確かにキヨカは門番(ポーディスト)の蜘蛛(アラネーオ)に資格者(ティトーロン)と認められてたけど、それとなにか関係があるのか？

「璃織魚さんが珍しく思う能力(ちから)って.....気になりますね」

「確かに、璃織魚様が、そう仰るのは、あたしも初めてです」

「そうですね。先延ばしにして、不安にさせる必要もありませんし、特に危険な能力(ちから)とい

うわけでもありませんので、言わせていただきます」

その言葉に、彼女以外の全員が息を呑む。

「彼女の能力(ちから)は、『時の口』を作る能力(ちから)、です」

一瞬、時間が止まったようだった。

「……………璃織魚さん、それって……」

「その言葉の通りです。彼女は、『時の口』を作る事ができます」

「それって、あれですか。ここに作ろうと思えば、それができるって事ですか？」

椎崎さんが、目の前を手で囲むようにしながら訊く。

「そうです」

「いつでも、どこでも作れる、と」

「そうです」

「移動の時に、元の場所に戻ったり探さなくてもいいと」

「そうです」

「……………なんつう能力(ちから)だよ。これも、時空(とき)の能力者って事ですよね」

「そうです」

「まあ、ペアで移動できるなら、それでいいし、むしろ便利になって好都合かもしれないけど……」

そこで、椎崎さんが俺を見る。

「その分、こっちが不利な能力(ちから)なのか」

不利？

俺の能力(ちから)が？

「そうかもしれませんね」

「なるほど。バランスはとれているわけですか」

女の子とスーツの女性が納得する。

「やっぱ、遡るってのは厳しいかもな。先へ行けないって事だもんな。っていうか、戻ってこれるのか？」

「そうですね。遡っていただけですと、戻ってこれないですよね」

椎崎さんの疑問に、スーツの女性も頷く。

そういう風に言われると、俺も不安になってくる。椎崎さんの言う通りだと、確かに遡る事ができても、先へ進めないなら戻れないという事だ。つまり、過去には行けるけど、未来には移動できない。

「その点は大丈夫かと思えます」

女の子が口を開く。

「あくまでも、この世界での時間が基準となっているはずですので、この世界からの過去です」

「なるほど。ここがゼロポイントって事ですか。スタート地点は、未来じゃないから戻るという概念じゃない、と」

「そうですね」

「それだと、一年旅しても、戻ってきたら、元の時間って事ですか？」

「そうではなさそうです。この能力(ちから)は、あくまでもこの世界での生活時間が基準になっていますので、一年旅をすれば、やはりこちらでも一年が経っているという計算になります」

「.....ややこしい能力(ちから)ですね。基準が動くってのは、既に基準じゃない気もしてきましたよ」

「それは、世界が生物の身体時間と実際の時間のずれを認めないという事でしょう」

「なるほど。どの世界にいても、元の世界での生活時間と捉えられるわけですか」

「そうですね。その辺は、MLCの管轄(かんかつ)でしょうけど」

「まあ、あそこにとやかく言えませんからね。そういうものだと納得するのが手っとり早そうですね」

「そういう考えでいいと思います」

.....なんだ？

なんなんだ？

椎崎さんと女の子の会話に、全くついていけない。スーツの女性は、頷きながらそれを聞いているから、きっとわかってるんだろう。

だけど、俺は全然わからない。きっと、キヨカもだろう。

いったい、なにを話してるんだ？

日本語.....なのはわかるんだが、理解できる内容じゃない。

この人たちは、俺たちとは別の世界の住人なんじゃないだろうか。

「結論が出た。まあ、そんな不利ってわけでもなさそうだ。むしろ、彼女の能力(ちから)がある分、かなり便利だと思う。いざとなったら、移動すればいいわけだしな。.....だが、自由に世界を移動できるわけじゃないから、そこは俺の能力(ちから)の方が便利かもな」

.....最後のは負け惜しみ？

いやいや、そもそも実感がないんだって。

「その辺りは、おそらく解消されるかと思われませよ」

椎崎さんの優越感を打ち砕くように、女の子がさらりと告げる。

「なっ.....。ど、どういう事ですか」

「それは、おそらく彼女が.....」

女の子はキヨカを見る。

「彼女？」

「はい。正確には、彼女とともに存在する門番(ポーディスト)の蜘蛛(アラネーオ)が解決してくれるはずですよ」

門番(ポーディスト)の蜘蛛(アラネーオ)が解決？ どういう事なんだ？

「それって.....」

「遠野(とおの)心歌(きよか)さん、でしたね」

女の子に問われ、キヨカは緊張した面持ちで頷く。

「は、ひゃい」

しかも噛んだ。

「あなたの中にいる、門番(ポーディスト)の蜘蛛(アラネーオ)とお話しさせていただきますか？」

にこやかな笑みで訊かれて、キヨカはますます緊張する。

「お話し……ですか。で、でも、どうすれば……」

「その左手をこちらへ」

「左手……」

包帯に覆われた左手を恐る恐る差し出す。

「ありがとうございます」

女の子は、それを優しく両手で包む。

「門番(ポーディスト)の蜘蛛(アラネーオ)よ、我の声に応えよ。我、D i oとして命じる」

「我 神(D i o)を認めたり 神(D i o)の要請に全て応えよう、

「なっ！」

「えっ！」

俺とキヨカはもちろん、椎崎さんとスーツの女性も驚きを隠せなかった。突然、声が聞こえた

。

これは……蜘蛛(アラネーオ)の声か。

「蜘蛛(アラネーオ)よ、私の要請に応え、その能力(ちから)を詳(つまび)らかにせよ」

女の子が話し掛け続ける。

「神(D i o)の要請に応えよう 私の能力(ちから)を神(D i o)へと伝える 我 蟲(ベステート)を追う能力(ちから)有り 時空(とき)を超えて追い 封印する、

それを聞いて、女の子がふむふむと頷く。

「……なるほど。時空(とき)の能力者が時空を移動する時に、蜘蛛(アラネーオ)が補正をかけて、然るべき世界に行けるというわけですね」

「……………それって、蜘蛛(アラネーオ)が俺と同じ能力(ちから)を……」

椎崎さんが、愕然としている。なんだ、ものすごく残念そうだ。

「そうなりますね。蜘蛛(アラネーオ)の場合は、蟲(ベステート)の封印限定ですが」

「しかし、この旅に限れば、俺と同じ……」

「椎崎さん、そんなに悔しがらなくてもよくないですか？」

スーツの女性が笑う。

「なにを言いますか、宍神さん。俺の優位性が失われてるんですよ」

椎崎さんが子どものごねる。

なんだろう。本来なら、緊張するような場面のはずなのに。

「これで、旅の無駄が省けますね。できる限り、早急に封印を終えねばなりませんから」

「そうですね。蟲(ベステート)の封印は重要事項ですから。世界をどう破壊するのか未知数ですからね」

「確かに。……というわけで、最低限の情報はこのくらいで大丈夫ですかね」

「そうですね。それでは、とりあえず旅の準備ですね」

なんだか、俺たちそっちのけで話が進んでいる。この会話に入れない。

「資金や報酬については、全て宍神さんにお任せします。通常業務もあって大変でしょうが、お願いします」

「わかりました。基金から拝借します。一四ですから、世界もそれだけ移動するとして、日数を考慮すると……」

と、なにやらぶつぶつ言いながら、スーツの女性が部屋を出て行った。

「それじゃ、俺はこの二人を宿に……」

「そうですね。お願いします」

「じゃあ行くか」

椎崎さんがそう言って部屋を出るので、慌ててそれについていく。ここに置いていかれるわけにはいかない。

「は、はい。行くぞ、キヨカ」

半ば放心状態のキヨカの手を取って、部屋を出ていく。

「また、準備ができましたらお会いしましょう」

部屋の中で、女の子がお辞儀をしている。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

エレベーターに乗り込むと、少しだけ落ち着く。

「なかなか面白い能力(ちから)だったな」

俺たちを見ながら、椎崎さんが笑う。

「俺の能力(ちから)もレアだったけど、彼女のは.....便利だ。できれば、一緒に旅をしてみたいが、俺には大切なパートナーがいるから、それはしないんだけどな」

一人で話しているうちに、エレベーターは一階に到着した。

「さて、今日の宿へご案内だな」

「あ、あの.....」

緊張して話を切り出す。

ここからだ、俺の部屋が近い。荷物もだいたいそっちなので、その方がありがたい。

「どうした？」

「あのですね。俺が住んでる部屋があるんですけど、できればそこの方が.....」

「.....」

椎崎さんが俺をじっと見る。

もしかして、失礼だったかな。怒らせたかも。

そうだよな。宿を手配してくれてたのに、それを無碍にするのはな.....。

「すみません。部屋には、また明日にでも行きますから」

「いや、それはいいんだ。それは、彼女も一緒にいいんだよな」

ちらりとキヨカを見る。

「はい。一緒にいいよな？」

「わ、わたし？」

キヨカは驚いて挙動不審になる。緊張して、放心状態だったところに、名前を呼ばれて驚いたようだ。

「これから、宿に行くんだけど、ここからだったら、俺の部屋にも行けるからさ、俺の部屋の方がいいんじゃないかと思ったんだけど、キヨカはどうする？」

「わたしは、トールちゃんのお部屋でいいよ」

「まあ、彼女がそれでいいなら、こっちは全然構わないぞ」

「せっかくなの厚意を無碍にして、申し訳ありません」

深々と頭を下げる。

「そんなに畏(かしこ)まらなくていいって。宿っていても、そんな豪華な所でもなかったし、正直なところ、これから探そうかと思ってたしな。最悪、俺の家とかな」

椎崎さんが、そう言って豪快に笑ってくれたので、気が楽になった。

「まあ、こっちで生活してるなら、迷う事もないし、二人だけでも行けるか」

「はい、大丈夫です」

「俺も行きたい場所があったからな。早く、亜依に会いたいからな」

確か、椎崎さんの奥さんだっけ。

それだけ、奥さんの事が好きなんだ。

なんか、いいな。

見てて、こっちが恥ずかしいけど、ある意味では理想だよな。

「それはそうと、なかなか堂に入った感じだったな」

唐突に言われて、なんの事かわからない。

「神崎グループの会長で、神の能力者の璃織魚さんを前に、結構普通に話してたしな」

「会長……。神の能力者……………」

ちょっと待て。

あそこにいたのは、ここにいる三人と、スーツの女性と、俺たちくらいの女の子……。

「――っ！」

おいおい。

まさか……。

「あの……会長って……………」

「トールちゃん、もしかして気付いてなかった？ っていうか、知らなかったの？ もしかしなくても莫迦？」

キヨカに、じと目で見られる。

「まさか、あの女の子が……」

「トールちゃん、それって失礼だよ。確かに、わたしたちと年齢はあんまり変わらないけどさ」

キヨカが急に饒舌(じょうぜつ)になる。

「まさかとは思ったけど、会長さんを前にして、あんな風に話すんだもん。わたしは、見た瞬間から緊張して、息も出来なかったんだよ」

そういえば、あのキヨカがあんなに緊張してたのには、そういう理由があったのか。

「そっかそっか。知らなかったのか」

椎崎さんが豪快に笑う。

「てっきり、会長とか神様とかだったから、年輩の人かと……。今日は忙しくて、お孫さんが代理で……と」

「トールちゃんって、無知だよな。あの神崎グループの会長さんを知らなかったなんて。よくそんなので、進学できたよね」

キヨカは心底呆れているようだ。

だが、そう思われてもしょうがないレベルだな。

確かに、初対面で、あの神崎グループの会長に、平然とした態度でいられるのは、余程度胸があるか、余程の莫迦かのどちらかだろう。俺の場合は、完全に後者だ。

「確かに、思い返せばそうだよな……」

代理と勝手に思いこんでいたけど、俺たちの相手をしたのは間違いなく彼女だし、俺たちの能力(ちから)を調べたりしたのも彼女だ。

そもそも、蜘蛛(アラネーオ)相手に神と言ってたじゃないか。蜘蛛(アラネーオ)も神だと認めて

たし。

しかも、ちょっと前もそんな話を聞かされたような……。で、若い女の人だって言われて、驚いたような気がしなくもない。

うわっ、俺の記憶力ってやばいんじゃない。

冷静になれば、こうしてわかるのに、どうしてあの場所で……。

最悪だ。

なんか、もう一度会わなくちゃいけないんだよな。

今から緊張してきた。

どうしよう。

失礼な奴と思われてたら、この日本で生きていく自信がない。

名誉挽回に、蟲(ベステート)の封印を頑張らないと。

そういや、単位もやばかったけど、それよりももっと未来がやばくなってきた。

「ともかく、連絡先だけ教えておいてくれ」

俺とキヨカは、携帯の番号をそれぞれ教える。

「また詳細が決まったら連絡する。念のため言うておくが、しばらくはこれ以外の予定を入れな
いでくれよ」

「あの……どのくらいですか？」

キヨカがおずおずと訊く。

「そうだな……。君たちは今は夏休みかい？」

俺たちは同時に頷く。

「そうか。とりあえず、その間はずっとだろうな。そもそも、どのくらい掛かるかは、君たち次第だ。さっさと蟲(ベステート)を封印すれば、すぐに終わる。逆に言えば、封印できなければ、一年でも二年でも……」

それを聞いて、キヨカは身震いする。武者震いの類じゃなくて、マジで恐怖なんだろう。

「早くなんとかしないとだよ」

俺の服を引っ張りながら言われてもな……。

「俺だって、単位の事があるから、早く終わらせないとやばいんだよ。キヨカだって、出席日数とかあるだろ」

「そうなんだよ。そんなので留年なんて嫌だよ」

俺たちは腐っても学生だ。それなりのしがらみというか、社会人になれば関係なくとも、重要なものがある。

「ああ、その辺はなんとでもできるぞ」

「へっ？」

キヨカが間の抜けた声を出す。それを聞いてなければ、俺だって同じようにしてただろう。

「出席日数くらいなら、なんとでも操作できるだろ。ちなみに、今までの欠席ってどのくらいだ？」

「えっと……」

キヨカが口に指をあて、斜め上を見て数える。

「ほとんど無遅刻無欠席かなあ。何日か、風邪で休んだかもですけど」

「それなら大丈夫だろう。二ヶ月掛かったとしても、そのうち一ヶ月は夏期休暇中だ。実際の日数なら二〇日くらいか。その程度欠席で、留年はないだろう。問題は、彼の大学の単位だな」

今度は俺を見る。

「それは、教授次第だろ？」

「……はい」

キヨカの場合とは違って、こっちはもっと深刻だ。出席くらいなら、なんとでもしてもらえ...
...ないな。それすらも困難なのに、ゼミなんかはもっと無理だ。

必須の基本教養学科なら、なんとでもなるかもしれないが、こっちは難しいだろう。

「単位は、今年は諦める事になるかもしれないな。まあ、来年頑張ればいいんじゃないか」

椎崎さんがお気楽に言う。すみません。ちょっと殺意が。

「なんてのは冗談で。……といっても、あんまり時間を掛けると、冗談じゃなくなるぞ」

「その冗談は、冗談にならないので……」

「すまんすまん。だが、賄賂とかは問題になるから、そういうのは絶対がないから。ただ、会社の事情で手伝ってもらってるという位置づけで、学校側には申請する事になる」

「でも、それでも……」

「そうだな。単位は難しいだろうな。だから、できるだけ、早く終わらせないと、自分も危うい。ただ、これで君たちは、神崎グループと、しかもその会長とのパイプができた。これは、将来のプラスになると思うぞ」

うわあ、なんだか黒い考えだ。でも、正直それは利用できるかもしれない。といっても、どうすればいいのかわからないけど。せいぜい、神崎グループの会長に会った事があるんだってって自慢できるくらいか。

「そうそう、今回の旅には、ある程度の旅費と成功報酬が出る。ただ働きじゃないから、その辺は安心しておけ。正直、結構な額になると思う。具体的には、宍神さん……えっと、俺たちを迎えに来てくれた女の人が、今それを思案してるだろうから」

結構な額って、どんなもんなんだろう？

やっぱ、一〇〇万とかか？

所詮、ただの学生なんだ。その程度しか思いつかない。それ以上となると、現実味がなさすぎる。

「とにかく、今日は疲れてるだろうし、連絡しておきたい人だっているだろう。とにかく休んで、旅の準備をしておく事だ。色んな世界があるからな。どんな世界に行く事になるかもわからない。どんな場所でも対処できるように、服装はオールシーズン考えて用意しておく事。薬なんかも、ある程度揃えておく事。まあ、旅先で調達できるものがあるが、準備はしておけよ」

なんだか、旅行前に親に同じような事を言われたな。

でも、今回はそれとは日数や場所からして、比較すらできないんだよな。

「旅の先輩からの助言だ。用意は必要だからといって、荷物が多すぎるのも問題だからな。最小

限にしとけよ」

なんだか、矛盾している気もするが、そうでもないのか。

広く薄く準備しておく。

着替えなんかも最低限だよな。

キヨカは既に逢稀から、コマ付きのスーツケースに入れて持ってきている。消耗品関係は、こ
っちで買えばいい。

「なにか質問とかあれば、その都度連絡をくれればいい。とにかく、また明日って事だ」

「はい。そうさせていただきます」

俺とキヨカは頭を下げる。

正直、まだよくわかってないのかもしれない。

旅に出ると言われて、目的地がわからないって、準備のしようがない。

椎崎さんは、じゃあな、と言って、駐車場に向かう。

その姿を見送って、やがて見えなくなる。

俺たちは、神崎グループ本社のビル前に残された。

さて、どうしたものか。

「とにかく、俺の部屋に行くか」

「そうだね」

変な緊張感のまま、俺たちはとりあえず歩き出す。

まずは駅に向かおう。

そして、部屋に戻ってから、ゆっくり考えればいい。

電車で揺られながら、外の景色を見る。

流れていく景色をぼんやりと見るだけだ。

キヨカはずっと無言で、なにを考えてるのかわからない。

そもそも、俺だってなにを考えてるのか、自分でわからないんだ。

どうすればいいんだろうな。

そればかりだ。

その言葉ばかりで、結局なにも考えられない。

何度か乗り換えて、ようやく最寄り駅に到着する。ここから、部屋までは少し歩かないといけない。

俺とキヨカは、まるで自動的に歩いているだけのようだ。

無言で、並んで歩いている。

ただ足を動かしているだけで、なにも感じない。

いつもなら聞こえてくるような音がしない。そもそも、暑さすら感じていない。

どうしたらいいんだろう。

そうやって歩いていると、マンションが見えてきた。

慣れ親しんでいるはずの場所なのに、何故か違和感がある。なにもかも全てが、異世界に思える。

体が憶えている動作に任せて、部屋に入る。

ドアを開けると、むわっとした空気に押される。

「あっちい」

ようやく、感覚が戻ってきたようだ。

一気に暑さが襲ってくる。

それと同時に、汗でべたついたシャツが不快で仕方ない。今まで気付かなかったけど、汗でびしょびしょだ。

それはキヨカも同じだったようで、トールちゃんクーラー！ と、ドタドタと勝手に部屋に入って、エアコンのスイッチを入れる。

しかし、すぐに冷えるはずもなく、エアコンはガコガコと音を立てながら、マイペースに起動していく。

「おい、キヨカ……」

そこにいたら、生暖かい風が……と言おうとしたら、間に合わなかった。

「わきゃっ」

キヨカが玄関の方に戻ってきた。

「生暖かいよ……」

「当たり前だろ」

今、部屋に入っても暑いだけだ。

「とりあえず、荷物だけ置いて、コンビニに飯でも買いに行こう」

「うん、大賛成だよ」

緊張してて忘れてたけど、腹が減っている。それに、コンビニはエアコンがガンガンにきいているから、ここよりは確実に涼しい。

俺とキヨカは、荷物を玄関に置いて、エアコンをつけっぱなしのまま、鍵だけ掛けて、近くのコンビニを目指す。

「あっついねえ」

一度部屋に戻って安心したのか、現実だと思えてきたのか、ここに帰ってくるまでは感じなかった色々なものを感じるようになってきた。

暑さは感じないまでもよかったかもしれない。

うだるような暑さだ。

地球温暖化の影響なのか、なんとか現象とか知らないけど、異常な暑さだろ、これ。

最高気温が、体温と同じかそれ以上なんて、少し前まで考えられなかった。

そのくせ、それでも暑い暑い言ってたんだからな。今の暑さを考えれば、昔は涼しかったんだろうな。それでも、暑かったけどさ。

だらだらと歩きながら、ようやくマンションに到着。エレベーターで上がり、部屋に到着。

うん、なかなか大変だった。

ドアを開けると、涼しい風が。

う〜ん、やっぱりいいね。

「涼しいねえ」

キヨカは、嬉しそうに部屋の中に入っていく。まるで、自分の部屋のような。

まあ、勝手知ったるなんとやらなんだろうけど。

部屋に入ると、買って来た炭酸のペットボトルを冷蔵庫に入れる。

そして、グラスを二つ用意して、それぞれに氷を入れる。

「おい、キヨカ」

と、俺が頼もうと思ったら、既にキヨカはテーブルを用意していた。

折りたたみのテーブルを部屋に設置する。慣れてるな……。つうか、これじゃまるでキヨカの部屋みたいだぞ。

「ほらよ」

俺はそこに氷が入ったグラスを置く。

「キヨカはなに飲むんだ？」

そう言いながら、俺は自分のグラスに、今買って来たお茶を注ぐ。

「えっとね……」

そう言って、キヨカは自分のコンビニ袋から、パックのカフェオレを取り出す。

「ごめんね、用意してくれたのに」

「いや、別にいいさ」

ちゃんと自分の分は買ってたんだな。

パックのやつだし、ストローで飲むだろうから、グラスはいらないか。

「でも、やっぱり使おうかな。あんまり冷えてなさそうだし」

「水っぽくなるぞ」

「いいよ。トールちゃんが用意してくれてるもんね」

そう言って、キヨカはカフェオレの口をハサミで切り取って、グラスに注ぐ。

別によかったんだがな。

でも、その気遣いがちょっと嬉しかったりもした。そんな事は絶対、口にしないけど。できるわけないだろ。

「さてと、飯食うか」

コンビニ袋から冷やし中華とおにぎりを出す。

「トールちゃん、そのチョイスはどうなのかな」

なんだ？ なにか問題ありか？

「ん？ 別にいいだろ。麺とご飯で炭水化物コンビってか？」

「そうじゃなくて、おにぎりだよ」

「ん？ おにぎり？」

なにか問題でもあったか？ 普通のおにぎりだぞ。冷やし中華だから、炒飯(チャーハン)のおにぎりじゃないとダメって事か？

「ツナマヨ二つってどうかな」

ああ、そんな事か。

「いいだろうが。旨いし、好きなんだから」

ツナマヨ最高だろ。子どもから大人まで大人気の定番だろ。

コンビニおにぎりだからこその味なんだよ。これを家で作ると、何故だかこうならないんだよ。

いや、自分で作るのも旨いんだぞ。でもな、やっぱり違うんだよ。やっぱり、ツナマヨはコンビニなんだよ。

熱く語ると、絶対に引かれるので、語らないんだが。

「美味しいのは認めるけど、同じものっていうのがさ……」

「お菓子が飯のお前に言われたくないな」

「……そういえば、わたしの方が変なのか」

キヨカは自分のコンビニ袋を覗く。

「やっぱり、ちゃんとなにか買っておいた方がよかったかな」

「そうだぞ。さすがに、お菓子ばっかってのは問題だと思うぞ」

「そうだよね……。ねえ、トールちゃん、なにか食材ないの？」

「ねえよ」

即答してやった。

さすがに米と調味料関係はあるが、調理するほどの食材はない。

外食は金が掛かるから、滅多にしないし、コンビニ弁当だって久しぶりだ。基本は自炊。

学生の一人暮らしは、こうした節約が必要なんだ。

だから、買い物にだってしょっちゅう行くけど、基本的に使いきりだからな。その日の分があればいい。余ったら、翌日にそれでなにかを作ればいい。

作り置きしてる総菜(そうざい)はなかったよな……。

レトルトでなにかあったっけ。でも、レトルトカレーにしたって、ご飯がないと意味ないしな。今から炊いてもいいけど、時間が掛かるだろ。カップ麺ならすぐだけど、ストックあったかな……。

「ちょっと、冷蔵庫拝見」

キヨカが冷蔵庫に向かって行く。

そして、ドアを開けて中を凝視。

別に見られて恥ずかしいものでもないしな。そもそも、さっき入れたペットボトルくらいしか入ってないんじゃないかな。

「……トールちゃん、空っぽだよ。食べ物がなんにもないよ」

キヨカが泣きそうな顔で俺を見る。

「当たり前だ。無駄に詰め込んでもしょうがないだろ。ちなみに、料理はしてるからな」

「ううっ、ひもじいよ」

「あのな。だから言ったろ。ちゃんとした飯を買えって」

「そうだっけ？」

おいおい。

「しょうがねえな。俺のツナマヨを一つやるよ」

くそう。

貴重なツナマヨなんだがな……。

ここは涙を吞んで……。

バイバイ、俺のツナマヨ。キヨカに美味しく食べてもらえ。

「一つだけ？」

なにっ！

俺の大事なツナマヨなんだぞ。

「あのなあ。俺だって腹減ってるんだって」

大事なツナマヨだ。二つともは絶対にやらんっ！

「トールちゃん、それもちょうだい」

キヨカが指したのは、冷やし中華だった。

「冷中(れいちゅう)、美味しそうだよ」

……………おい、マジか。

冷やし中華とキヨカを交互に見る。

冷やし中華か……。

どうしよう……。

これを分けるべきか。

本当なら断るんだが、ここで断ると俺のツナマヨを奪いにきそうだな。

仕方ない。ここは冷やし中華を犠牲にして……。すまん、冷やし中華。

「全部はやらんが、半分分けてやるよ。皿と箸持ってこい」

「うん」

キヨカは満面の笑みで、皿と箸を持ってきた。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

こんな風に過ごしていると、俺たちが世界を滅ぼすようなものの封印を解いてしまって、これからそれを封印するために旅に出ないといけないなんて想像できないだろうな。つうか、誰かに話したところで、誰も信じないだろうな。

……ん？ なにか忘れて……。

「やばっ」

「どうしたの」

俺の声に、キヨカが驚く。

「いや、ちょっと電話しとかないと」

ヨシマサに電話だけしておこう。それに、ゼミの教授にも連絡しとかないとな。

でない、俺の単位がマジでやばい。

早速、ヨシマサに電話する。

『もしもし、なんだ？』

「ああ、俺だ」

ヨシマサはすぐに出てくれた。

『今回は携帯なんだな。で、どうしたんだ？』

「ああ、ちょっとな……。とりあえず今は部屋に戻ってきたんだ」

『そうか。じゃあ、ゼミには出れそうだな』

「その事なんだが……無理なんだ」

『おいおい、こっちにいるんだろ？ 出ないと単位がなくなるぞ』

「それはわかってる。だけど、やらなきゃいけない事があるんだよ」

『なんだ、それ。もしかして、この前の暗号みたいな文章と関係あるのか？』

勘がいい。

「まあな」

『それって、単位よりも重要なのか』

「そうだな。世界の存続に関わる事らしい」

『なんだ、それ』

正直に言うと、ヨシマサは盛大に笑いやがった。まあ、気持ちはわからなくはない。

『中学生みたいな妄想だな。なんか、マンガの読みすぎじゃねえのか』

「その気持ちはわかる。だが、どうやら冗談ですまないんだな、これが。実は、今日もその件で神崎グループの本社ビルに行ってきたんだ」

『……………はあ？』

電話の向こうながら、ヨシマサの様子が手に取るようにわかる。逆の立場なら、俺だって同じだろうからな。

『寝言は寝て言えよ。なんだその、洒落(しゃれ)にしても全然面白くないのは』

「俺だって、未だに信じられないんだよ。けどな、会長にあって、直々に話したんだぞ」

『……マジで？ お前、夢でも見たんじゃないのか？』

「俺だって、夢だったら楽だと思っさ。だけど、どうもマジなんだな」

『壮大なドッキリ……いや、こんなヤツに仕掛けても、なんの得もないよな。って事は、マジなのか』

「だから、マジだと言っただろ」

『信じれるか、そんなの』

「……………だよなあ」

同意するしかない。

『つまり、お前は神崎の会長に頼まれて、世界を救う、と？』

「ぶっちゃけそうだな」

『……………そうか。うん、わかった』

ああ、納得しようと努力してくれてるのか。

夢物語すぎて、現実味がないよな。

『で、本当の理由はなんだ？ お前がそんなストーリーテラーだとは思わなかったぞ』

信じてない。

いや、これが普通の反応だよな。これをすんなり信じるなんて、あり得ない。どんだけ順応性あるんだよ。

「まあ、そういう事にしておいてくれないか。教授には、これから自分で電話する」

『そうか……来年は後輩になってるんだな、お前は』

うっ……………。

なんだか、こっちの方が現実味があるぞ。

「そこはなんとかしてみせる」

『そうだな。さっきみたいな、面白い話をしたら、もしかしたら可能性があるかもな。あれを面白いと判断してくれるとは思えないけどな』

「……善処してみる」

『健闘を祈る』

「ああ、じゃあそれだけ言っておこうと思ってな」

『そうか。……で、シフォンスペシャルショコラサンデーはいつになりそうだ？』

「……この用事が終わったらな」

『絶対に奢ってもらうからな。逃げるなよ』

「……わかったよ」

ったく……。奢りゃいいんだろうが。なんだか、あの約束をなかった事にしたくなってきた。

『絶対だぞ。忘れたりしないし、なかった事になんか絶対にしないからな』

念押しだよ。

「わかったって」

『本当だな。言っただけ言わないの口論は勘弁だぞ』

「わかってる」

『なら、誓約のメールを送れ』

そこまでさせるのか。

「わかったよ」

『すぐ送れよ』

「ああ」

なんだ、この必死さは。ここまで必死にしなくても、約束は破らないつもりだ。俺って、そんなに信用ないのか？

それにしても、そこまでして食べたいってのは、どんなものなんだろう？ 俺も一緒に食おうかな。

「じゃあな」

『ああ』

ヨシマサとの通話を終えて、すぐにメールを送信しておく。

でないと、催促の電話かメールが来るだろうからな。

「えっと……シフォン……なんとかサンデーを奢る、と」

ポチッと送信。

すると、すぐに返信があった。

「商品名は正しく書け。シフォンスペシャルショコラサンデーだ。」

「……………ったく」

しょうがないので、これに返信する。

「京極(きょうごく)公(とおる)は、お礼として満仲(まんなか)嘉雅(よしまさ)に、シフォンスペシャルショコラサンデーを奢る。」

「これでいいだろう」

ポチッと送信。

すぐに「確かに受け取った、と返信があった。」

「やれやれ」

なんだか、一仕事終えた気分だ。

「あとは、教授に電話か……」

これが厄介だ。つうか、億劫だ。

教授に電話とか、考えただけで胃が痛い。

「どうしたの？」

キヨカがスナック菓子をもしゃもしゃ食べながら訊いてくる。って、まだ食べてるのかよ。いつまで食べるつもりだ。

目の前で食べられると、こっちも食べなくなってくる。

でも、どうせ分けてくれないんだろうな。

それよりも、今は俺の単位だ。

「ちょっと、単位の事だな。教授に連絡しておかないと」

「ふうん、大変だね」

適当な相槌だ。それだけで興味をなくしたのか、テレビを見ながらもしかもしゃ食べている。

そりゃ、どんだけくだらない話題でも、俺の単位よりは面白いだろうな。

ふう〜と大きなため息を吐いて、電話を掛ける。電話でこんなに緊張するのもどうだろうな。

何度かコールするが、なかなか出ない。

なんだろう？ 出れないような状況なのか？

だったら、留守電設定にしてるだろ、あの教授なら。

そんな事を考えていると、相手が出た。

『もしもし、誰だ』

なんだ、機嫌悪そうな声だぞ。

「もしもし、ゼミ生の京極です。お忙しいところ、申し訳ありません」

『ああ、京極君か。どうかしたのか？』

「はい、今、お電話は大丈夫ですか？」

『ああ、問題ない。少し眠ってしまっただけだ。起こしてくれて助かった』

「そうですか」

この人の場合、嫌みじゃないはずだから、本当にそうだろう。これは、ポイントを稼げたか？

「ちょっと教授にご相談があって、お電話させていただいたのですが……」

『なにかね？』

「ゼミがあったかと思うのですが」

『ああ、そうだ』

「それが、用事があって出席できなくてですね……。申し訳ありませんでした。」

『なるほど。京極君は単位が必要ない、と』

「きょ、教授。どうしても外せない、重要な用事だったんです」

『一応、用事とやらの内容を訊いてやろうか。起こしてくれた礼だ』

「ありがとうございます」

『先に言っておくが、ちょっとやそつの理由では、認めないのでそのつもりで』
ごくりと唾を飲む。

わかっていたが、なかなか難しそうだ。

『もちろん、彼女と逢い引きなど、重要性の欠片もないので、理由にはならんぞ』
そりゃそうだ。俺でもそう思う。

「かいつまんで説明しますと、世界を救わないといけなくなりました」

『京極君は、単位が必要ないようだね』

ですよねえ。

いきなり言っても、そう言われると思ったよ。

「それが、本当なんです。神崎グループの会長さんに頼まれまして……。まあ、原因の一端が自分にもありまして……」

『創作は構わないが、突拍子もなさすぎるのは関心しないな。文芸サークルでも、その程度のも

のなら没にされるだろう』

信じるはずはないし、ダメ出しまでされた。

確かに創作で、こんな突拍子もない……しかも、世界の神崎グループの、さらにはその会長を引き合いに出して、そんなのはあり得ないだろうな。

でも、現実はこうなんだから、他に説明のしようがない。

嘘の理由をでっち上げて、意味がないのはわかってるし、そっちの方がバレた時がやばい。「そうですよね。ちょっと、田舎に行ってきました……そうです、そこはまだ黒電話があるんですよ」

電話の向こうで、教授が息を呑むのがわかる。

これは、なんとかなるかも。

『そうか。それは紹介してもらいたいものだな』

「それはもちろん。それです……ゼミに出席はできないのですが、各地のレポートの提出で、なんとか単位を……」

『それは別問題だ。出席せずにレポートだけで認めてもらおうというのは、認めるわけにはいかない』

ちっ。

「そこをなんとか……」

『単位取得には、ゼミへの出席が最低条件だ』

「そこをなんとかお願いします」

何度も電話越しに頼み込む。

電話でなく、直接会って頼み込んでも同じだろうな。

『ともかく、黒電話の件、楽しみにしているよ』

それだけ言って、電話は切られた。

最悪だ。

予想していたが、それだけに厳しいな。

わかっていて玉砕するのって、想像してたよりこたえる。

携帯を閉じると、大きなため息が出る。

魂が抜けていくみたいだ。

「大変そうだね」

完全に他人事のキヨカが、テレビを見たまま言う。こっちを見てすらない。

「留年するかもしれない」

「それは大変だ。わたしと同級生になれるかもね」

……………マジであり得るから怖い。

でも、単位をひとつ落とすくらいで、さすがにそれはないだろう。そう信じたい。

「神様ならなんとかしてくれるかもよ」

……………できそうだな。

「それは無理じゃないか？」

一応、否定してみる。

「できるかもよ。だって、あの神崎グループだよ。その会長さんが言えば、大学くらい簡単に動くんじゃないの？」

「……どうだろうな。できそうな気はするけど、さすがに実行しないだろ」

「お願いだけでもしてみたら」

「……そうだな。マジでやばくなったら、考えてみる」

最終手段にしておこう。あんまり頼りたくないな。そもそも、言いづらい。なんだか、それは反則じゃないかな……と。

まあ、教授への談判は玉砕だったわけで……。もう、どうしようもない。

「さてと、どうするかな……」

旅の準備でもした方がいいんだろうが、いつどこへ……という具体的なものがないと、なんだかしようという気にならない。

人間、切羽詰まらないと動かないものだ。夏休みの宿題だって、最後にまとめてするもんだし。

「トールちゃん、準備始めようか」

キヨカが、よっと立ち上がる。

どうやら、やる気になっているらしい。

「えらくやる気満々だな」

「だって、テレビ飽きたもん」

「……………そうなんだ」

なるほど。どうやら、ワイドショーに飽きたらしい。まあ、俺も結構前から飽きてたけどな。

だって、どうでもいい話題だしな。よく、そんなので盛り上げられるな。

たまに時事問題みたいなのもしてるけど、少し前から同じような内容で、進捗がないんだから、どうしたって飽きてくる。

毎日毎日、同じ事をよくできるものだ。そんな劇的に変化がないんだから、もうちょっと考えてやれよな。それも、どこかがまとめればいいのに、色々な番組で語るものだから、どれも同じになってしまって、飽きが早くなる。

「トールちゃん、スーツケースどこ？」

キヨカはかなりやる気になってくれているらしい。手伝ってくれるなら、準備も早いだろう。

「スーツケースなら、クローゼットの奥にあると思うぞ」

「了解」

俺が言うが早いか、キヨカはクローゼットを開けていた。

そんなに服があるわけでもないし、荷物自体が少ないから、クローゼットはほとんど空に近い。

「あったよ」

なので、すぐに見つかった。

「お洋服って、これだけ？」

クローゼットの中にある衣装ケースを開けながら訊いてくる。

「ああ」

「全然ないんだね」

「何着かあれば、充分だからな。洗濯を溜め込まなければそんなにいらないだろ」

「そうだけど……。もうちょっとお洒落……。なのは、トールちゃんには無理だね」

キヨカは、やれやれとため息を吐きながら、てきぱきとスーツケースに服を入れていく。

少ないので、あっという間だった。

今になって気付いたが、キヨカは平然と下着まで……。おいおい、もうちょっと恥じらいとかないのか。気付いたこっちが恥ずかしい。

「まだまだ入るね」

確かにスーツケースにはまだまだ入る。

「別に満杯にする必要はないだろ。旅の途中で、荷物が増えるかもしれないし」

「そうだね。お土産とかもあるよね」

それはどうだろうな。そんな旅じゃない気がするんだが……。

そういや……。

「キヨカ、これを使えよ」

キヨカにある物を投げる。

「え、な、なに？」

突然の事に驚きながらも、なんとかそれをキャッチする。

「えっ？ なに、これ……」

受け取ったそれをしげしげと眺めている。

「トールちゃん、これって……」

俺が渡した白いものを俺に見せてくる。

「よかったら使ってくれ」

「……う、うん」

キヨカは戸惑いながら、それを見ている。

しばらく見ていたが、包帯を解いて、左手にそれを着ける。

そして、ぎゅっぎゅと左手を握ったり開いたりを繰り返す。

そう、俺が渡したのはグローブだ。それも、オープンフィンガーグローブ。色は白。

まあ、包帯っぽさはそのままだけどな。でも、包帯よりは幾分かましなはずだ。

なんだか、左手が痛々しかったしな。

「ど、どうだ？ やっぱいらないか」

失敗だったかと思って訊く。

「う、ううん。嬉しいよ。いきなりでビックリだっただけ」

まじまじと左手を見ている。

なんか感動してるのか？ もしそうなら、俺こそ感動ものだぞ。

「まあ、たいしたものじゃないけど、包帯よりはいいだろ」

「うん。ありがとうだよ」

キヨカは何度も左手を見ている。

「すごいよ……」

ニヤニヤとしているので、嬉しいのは本当だろう。

「トールちゃん、ありがとう」

「お、おう」

ストレートにそう言われると、照れるってのもあるし、なんだかどうしていいかわからなくなる。

こういうのって恥ずかしいよな。

キヨカは嬉しそうに、何度も何度も左手を閉じたり開いたりしている。

「これ、大事にするね」

「あ、ああ」

やっぱり戸惑ってしまう。

なんだかんだで、経験値が少ないんだよな……。

とにかく、荷造りでもしてる振りして、誤魔化すしかないか……って、詰めるような荷物がない。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

「眠れねえ」

布団を被る。

遠足前の小学生かよ。

なんだか、最近ずっとこんな感じだ。

地図を見つけて、白西山(はくせいざん)に登った時もそうだし、蟲(ベステート)を解放してしま
って、闘った時もそうだったし……。それに、神様に会うからって、こっちに来る時もそうだ
った。

緊張していて、寝ていた記憶が……………いや、車の中で寝たっけ。

それはそれとして、目が冴えまくって眠れない。

携帯を見ると、もう三時だ。俺的には二七時だが。

本来は俺のだが、ベッドを占拠しているキヨカは……、

「ううっ、眠れないよ」

同じだった。

「キヨカ、ちゃんと寝ないと、明日きついぞ」

明日は、いよいよ旅に出る。

「無理だよ。だって、国内旅行でも楽しみで、目が冴えちゃうのに、世界旅行だよ。しかも、こ
こじゃない世界にも行けたりするんだよ」

「だよな……」

キヨカの気持ちはよくわかる。

誰かと約束して遊びに行く時だって、俺は緊張して寝不足になる。さすがに、それはキヨカに
は言わない。

でも、世界だぞ、世界。地球じゃない世界や、過去の世界にも行くんだろ。これで、わくわく
するなっるのが無理だろ。

楽しみな気持ちと同じくらい、不安な気持ちがあるけど。

だって、どこに行くかは決めれないんだろ。しかも、着いてみないとわからないし。

そういや、言葉とか大丈夫なのかな……。

俺、英語なんてほとんどできないぞ。第二外国語はロシア語だしな……。通じるのか？

この世界の他の国でも不安なのに、別の世界なんて、どうなるんだろう？ まさか、日本語で
通じるわけないだろ。

ってかさ、他の世界ってどんなだろう？ 人間だよな。

まさか、トカゲ人間とか、動物が喋ったりとか……あり得そうだ。

どんな世界なのか、前向きに考えれば楽しみだよな。

だけど、戦争をしている国もあるだろうし……っていうか、していない国ってのが不思議なの
かもな。

今だって、日本は平和に思えてるだけで、本当に平和なのかわからないよな。そもそも、平和

ボケしてる俺たちが、そんなの大丈夫なのか？

まあ、その程度の危機感があれば大丈夫なのか？

ああ、余計な事を考えると、ますます不安になってきた。変な事を考えるんじゃないかった。

楽しい事だけ考える方がいいな。

ぼんやりと考えていると、ますます目が冴えてきて、眠気なんて完全にどこかへいってしまった。

どうして、こういう時は睡魔が襲ってこないんだ？

結局、一睡もできなかった。それはキヨカも同じだったようだ。

翌朝――ってというか、俺たちからすれば昨日と続いているわけだが、遅刻しないように八時（俺たちの的には三二時）には朝食を済ませて、家を出た。

家を出ると、既に熱気がむんむん。

朝は涼しいといっても、熱帯夜が続いていると、それほど涼しくはない。

「暑いね……」

キヨカはハンカチで汗を拭う。

ただ立っているだけならまだしも、少し歩くだけでも汗が滝のように流れる。

「ああ、なんつう暑さだよ」

空を見上げると、雲はひとつもなく、真っ青だ。

風もなく、じめっとしている。

からっと暑いならまだしも、じめっとしてるのはきついよな……。これぞ日本の夏なんだろうけど。

汗を拭うにも、ハンカチじゃ役不足って感じだな。こりゃ、タオルを巻き付けてないと……。

「暑すぎだよ……」

「ああ」

暑さに比べて、俺たちは徹夜という事もあり、一気に体力が奪われる。

この調子で大丈夫なのか？

とにかく、ガラガラとキャスター付きのスーツケースを転がして、駅を目指して歩いていく。

普段ならそうは思わない道のりは、今は茨の道だ。じりじりと照りつける太陽が恨めしい。もうちょっとだけ、休んでもいいぞお前は。

だらだらと流れてくる汗と一緒に体力も流れてるんじゃないだろうか。

ちょっとした坂でも、足が動かなくなってくる。

会話する余裕はなく、暑い暑いとぼやく声と、ぜいぜいという荒い息、そしてガラガラとなるキャスターの音だけだ。

みんなみんとか、じじじと鳴く蝉こそ封印してやりたい。

「トールちゃん……まだあ？」

まだってのは、駅までって事だろうか。

「もうすぐだ」

もう本当に数分だ。普通なら。

「電車は涼しいよね」

「そうだろうな」

そうであって欲しい。

えっちらおっちらと、息も絶え絶えになりながら駅に到着。

改札は道路から見れば二階にある。階段が辛いので、エレベーターを探す。普段は階段だから、エレベーターって使ってなかったんだよな。ちなみに、エスカレーターは点検中だった。

どうにかエレベーターを見つけたが、普段使ってる出入り口の反対側だった。つまり、駅をぐるりと回り込まないといけなかった。中に突っ切れる通路がなかった。

この構造なんとかしてくれ。今、切実に思う。

ようやく切符を購入し、ホームへ向かう。駅は熱気むんむんだった。

開放的ではあるのだが、騒音防止の為なのか壁があるので、そう涼しくはない。まあ、これはここに限った事じゃないけど。

しかも、ちょうどホームに到着した時、向かう方向の電車が発車してしまったので、しばらく待たないといけない。

「暑いよ……」

キヨカは、スーツケースにもたれ掛かるように座り込む。

「もう、だめだ……」

俺も同じように座り込む。

徹夜+暑さ+疲れ=もうだめ——ってな方程式が成立した。

快速など、目的の駅に止まらない電車をスルーして待つ事十分。ようやく目的の電車だ。

ドアが開いた途端、ひんやりとした風が俺たちを生き返らせてくれる。

この風のお蔭で立ち上がったようなものだ。

電車はそれなりに混んでいるようだが、乗り込んだ車両は最高尾だったせいなのか、座る事ができた。

「涼しいよ……」

スーツケースを前にして、どかりとキヨカが座り込む。

俺も、同じように右隣に座る。

「ホント、助かった……」

長時間乗るわけじゃないが、ずっと立っているのと座れるのとでは、雲泥の差だ。立ったままだったら、途中で倒れていたかもしれない。

しかし、座ってしまうと、電車の絶妙な揺れが眠気を誘う。

徹夜と疲れで、一瞬で睡魔に負けてしまいそうだ。こんな時に襲ってこないで、夜に襲えよな。

睡魔に愚痴を言いつつ、キヨカの方を見ると、船を漕ぎ始めている。

「おい、寝るなよ」

肩を揺すってキヨカを起こそうとするが、その手を払われてしまう。

「おい、寝るなっの」

もう一度挑戦。

しかし、キヨカは起きそうにない。

「しょうがねえな」

前に回って、両肩を掴む。

「起きろ。そろそろ乗り換えだ」

このまま寝過ごすなんて、たまったもんじゃない。意地でも起こしてやる。

「キヨカ、起きろ。起きやがれ」

あまりにも起きないので、デコピンをおみまいする。

「ったっっあ……」

ギロっとキヨカが睨んで……、

「なにするかあっ！」

右フック。

体力がなくなっている上に、予想外の……いや、予想の遥か斜め上の行動に、まともにくらってしまった。

乗客が少なかったのが幸か不幸か、俺は見事に吹っ飛んだ。バタンと大きな音を立て、電車の床に寝そべる羽目に。

周囲の乗客が俺を見ているのは、なんとなくだがわかる。

頭を動かすと、車掌室が見えた。

車掌は、なにが起きたのかわからずに、ただ俺を見ている。しかも、目が合ったら逸らされた。

「ったいよ、トールちゃん」

キヨカが座ったまま、でこを押さえて俺を見下ろしている。

「お前な……。いきなり右はないだろ」

ゆっくりと起き上がる。少し頭がくらくらするが、なんとか大丈夫そうだ。伊達にじいさんにボコられてたわけじゃない。

殴られた左頬が痛い。

腫(は)れてないだろうな……。

でも、あまりに綺麗に決まったからな……。

いいパンチだったぜ……なんて、こんな状況じゃなかったら言うんだが。

「トールちゃん、早く起きないと乗換駅だよ」

ふらふらと立ち上がろうとしていたので気付かなかったが、どうやらもうすぐ乗換駅らしい。

おいおい、大丈夫かよ、俺。

ようやく立っても、膝が笑ってるんだが。

「ほら、降りるよ」

キヨカが引っ張ってくれて、電車からはなんとか降りる事ができた。スーツケースは、その際になんとか掴んだ。

やばいやばい。危うく荷物だけ次の駅だったりするよ。

「もう、しっかりしてよね」

キヨカはなにやらぶんぶんしているが、俺はそれどころじゃないし、そもそもこれはキヨカのせいだ。

「あのなあ……」

文句を言おうとしたが、キヨカが歩き出す。

「遅刻しちゃうよ」

「お、おい……」

携帯で時間を確認すると、確かにのんびりしすぎると遅刻だ。思ったより時間が経っていたらしい。まあ、駅に着くまでが大変だったからな。早めに部屋を出て正解だ。

「待ってくれよ」

ガラガラとスーツケースを引っ張って、キヨカの後を追う。

完全に目が覚めたというか、少しだけ微睡んで体力を回復したのか、キヨカの足取りは軽かった。

そんなこんなで、乗り換えたりをして、ようやく目的の駅まで到着。

ここからはまた徒歩だ。

あいにく、あれ以降座れなかったので、体力がレッドゾーンに入ってきている。

体調管理がなってないのかな。

駅を出ると、熱気で溶かされそうになった。それだけ、駅の中って涼しかったのか。

キヨカも茹(ゆ)だるような暑さに、ぐったりとしている。

「さあ、行くぞ」

思い切って一歩踏み出す。

屋根がない場所になると、熱だけじゃなく、直射日光が俺たちを襲う。

「ううっ、紫外線はお肌の大敵だよ」

なにやらぼやいてやがる。

「強弱はあるけど、紫外線は曇っててもあるからな」

「そんなのわかってるよ。でも、こんがり真っ黒になっちゃうよ。ガングロはやだよ」

キヨカのガングロを想像してみる。

「……ないな」

それはなしだろ。

そりゃ、小さい頃は、長閑(のどか)なああの村を駆けずり回って、真っ黒になっていたもんだが、さすがに今は無理だ。

ガンガンに太陽光線を浴びて、ガラガラと音を立てて歩く。

目指す場所は、他とは一線を画しているので、迷う事はない。が……そこまでが遠い。

じりじりと焦がされながら、体力の限界を感じつつ歩いていく。

「遠いよ……」

実際はそれほどでもないはずなのだが、疲れきっている俺たちには遥かなる天竺って感じだ。

「暑い……」

「トールちゃん、なんとかして」

無理だろ。

「なんもできるか」

俺だってなんとかして欲しいくらいだ。

文句を言いつつ、ようやく到着する。

それにしても、やっぱり場違いだろ、俺たち。

目の前に聳えるビルは、俺たちには無縁だったはずの場所だ。それが、今や関係ありまくりなんだから、世の中不思議だ。

明らかに不釣り合いな俺たちの横を、汗をハンカチで拭いながらサラリーマンが通っていく。

そうだよな。社会人に夏休みは関係ないんだよな。学生ほどあるわけじゃないんだし。

だとしたら、学生の間には堪能しておくべきだろうな。

大学って、妙に長いし、特に。

汗をしつつ働く社会人を見ているとなんだか不思議だ。自分もああなるんだろうけど、全然想像できないんだよな。

毎日スーツにネクタイか……。

あっ実際にそうなれば当たり前なんだろうけど、やっぱり想像できない。

正直、中学生とか高校生の制服も、昔は想像できなかったな。さすがに小学生にそれは無理だろうけどさ。

でも、大人に見えたのは本当だよな。でも、自分がそうなった時は、全然普通だったし。やっぱり、そういうものなんだろう。

「それにしても、どこで待てばいいんだろう」

さすがにビル内に入る勇気はない。

だからといって、ビルの外は直射日光。

ついでに、外にいと通っていく人たちの視線が。

まあ、不審だろうよ。

携帯で確認すると、まだ約束の時間までは三〇分はある。

どうしたものか……。

携帯を見ていると、着信が。

「おわっ」

慌てて通話を押す。

「おはよう。そんなとこにいないで、入ってきたらどうだ」

椎崎さんからだった。

「入ってって……」

と、ビルの方を見ると、そこには椎崎さんの姿が。

「トールちゃん、あれって……」

キヨカも見つけたようだ。

「予定よりは早いけど、向こうは大丈夫そうだ」

それだけ言って電話は切れた。

「トールちゃん、行こう」

キヨカは先に中に入っていく。

「ああ」

もしかして、中で待っててもよかったのかもな。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

自動ドアが開くと、ほどよい冷気が俺たちを包む。

冷えずぎてないけど、涼しいってのはすごいな。さすが大企業。

「結構な荷物だな」

会うなりそんな事を言われた。

そんなに多いかな？

「さて、上に行こうか」

椎崎さんは受付の人になにかを告げて戻ってくる。

「このやり取りって、ちょっと面倒なんだよな」

それって、あのスーツの女性を呼ぶって事かな？

「やっぱり、ここは落ち着かないよな……」

椎崎さんが天井を見る。

「あの……椎崎さんって、よくここに来てるんじゃないんですか？」

キヨカが俺も思っていた事を訊く。

「よくは来ないよ。俺の仕事はこことは関係ないといえはないからな。こういう事件があった時だけだよ」

「そうなんですか」

そうだったんだ。てっきり、ここじゃないにしろ、関連会社で働いているものかと思っていた

。そんな会話をしていると、スーツ姿の女性がやってきた。

「宍神さん、おはようございます」

「おはようございます。朝からご苦労様です。それと、改めまして、おめでとうございます」

おめでとう？ なにかあったのか？

「ありがとうございます。また、少ししたら唯依の時みたいに、お願いしないといけませんね」

「そうですね。ご連絡をいただけましたら、できるだけ調整させていただきます」

俺たちは完全に蚊帳の外だ。

そんな会話をしつつ、自然にエレベーターに乗り込んでいく。

遅れないように俺たちも乗り込む。

「それにしても、よろしかったんですか？」

「今更ですよ、それ」

「失礼しました」

「でも、向こうは大丈夫でしょう。むしろ、俺がいてもしょうがないですし」

「そんな事はないと思いますよ。亜依さんだって、椎崎さんがいてくれたら心強いでしょうし」

「そう……かもしれませぬね」

そんな会話を聞いていると、最上階に到着した。なんの話なのかはわからずじまいだが、俺たちには関係のない大人の話というやつなんだろう。

俺たちはただ二人についていっただけだ。こんな場所で、自主的に動けるもんじゃない。とことん受動的になってやる。

そのまま、昨日と同じ部屋に案内される。そこには、やっぱり昨日と同じように、俺たちと同じ年くらいの女の子がいた。

しかし、俺の気分は昨日と全然違う。

彼女はこの神崎グループの会長なのだ。本来なら、こんな風に会える人物じゃない。

そう思って見ると、なんだかオーラのようなものを感じる。

って、昨日は普通に話してたんだが。そんな俺を殴り倒してやりたいね。

でも、こんなすごい相手に、あんな風に接していたなんて、その度胸を褒めてやってもいいかも。無謀と紙一重だが。

「ようこそお越し下さいました」

ぺこりとお辞儀をされると、それだけで緊張する。

大企業の会長様で、しかも神様だろ。そんな相手がお辞儀なんて……。

こんなの、じいさんがここにいたら、俺は床に頭を押しつけられているんだろうな。実際、俺もそのくらいしないとまずいんじゃないかと思えてくる。

「どうぞ、お座り下さい」

スーツの女性に言われて、俺たちはソファに座る。相変わらずふかふかだ。ずっぼりと体が沈む。そして、包み込むように受け止めてくれる。

「椎崎さん、この度はおめでとうございます」

会長さんは、椎崎さんに微笑みかける。

会長さんもおめでとうって……なにがあったんだろう？

「ありがとうございます。さっき、宍神さんとも話したんですが、またあれお願いします」

「いえ、あれはこちらがお願いしているものですから、椎崎さんのご都合に合わせさせていただきます」

「ありがとうございます」

本当になにがあったんだ？ まあ、俺たちには関係ないんだろうけど。関係ないのと、気になるのは完全に別問題だがな。

キヨカも同じらしく、なんだかうずうずしているが、さすがに訊けないらしい。ちょっとキヨカに期待していたのだが、さすがにこの場では難しいようだ。

そんな話をしていると、スーツの女性が飲み物を持ってきてくれた。

「ありがとうございます」

テーブルに置かれる時にぺこりとお辞儀。

そして、同じくソファに座る。

「それでは、今回の件ですが……」

会長さんがスーツの女性を見る。

「では、私からお話しさせていただきます」

そう言って、何枚かの書類を俺たちの前に置く。

「最初にお詫びなのですが、本日はこうしてお荷物をお持ちいただきましたが、こちらの準備が間に合わず、申し訳ございません」

あ、そうなんだ。

準備ができてないんだ。

そうだよな。あらゆる世界に旅立つんだし、準備だって色々あるんだろう。俺には想像もできないけど。

「明日には大丈夫かと思います」

「まあ、しょうがないよな。いいんじゃないか」

この荷物は無駄だったわけか。せっかく苦労して持ってきたが、完全に徒労だったわけだ。

今日は旅立ちだと思ってから、緊張も無駄だったわけか。

でも、ある意味よかったかもしれない。今日のこの体調だと、旅に出たとしてもすぐにダウンしていただろうし。そもそも、旅に出る前の体調じゃないよな。

「本日お越し頂いたのは、こちらの書類にサインを頂きましたか」

そう言って、俺たちの前の書類を見る。

「そういえば、そんなのあるんですね」

「あるんです。椎崎さんの場合はしていませんでしたね。次回から、椎崎さんともさせていただきますでしょうか」

窘めるような感じだが、どこか意地悪をしている子どもみたいな雰囲気もある。

この二人って、なんだか不思議な距離間だな。

「別に、なくていいならなしでいいですよ」

「そう言われると思って、あえてしていませんでした。ただ、一応、書類だけは作成してましたからね」

「そうですか」

にこやかに話していたが、俺たちの方に顔を向けた瞬間、仕事用なのか引き締まった表情になる。

力強い――それでいて、どこか厳しい視線に、背筋が伸びる。ただ、どこか奥には優しさが感じられて、安心もある。

「すみません。それは別としまして、お二人にはそちらをお読みいただいて、サインを頂きたいのです。お二人は未成年ですので、保護者の同意が必要となるのですが、そちらは……」

「遠野氏にもらってくるというわけですね」

椎崎さんが口を挟む。

「そうです。本来はできないのですが、急を要するため、事後処理させていただきたいのです。ただ、そちらの契約書だけは、ご本人がいらっしゃいますので、お願いします」

そう言われて、目の前の書類を読んでいく。

どうやら契約書のような。こんなの初めてだよ。やばい契約じゃなさそうだけど。

内容は……、

「トールちゃん、これって……」

キヨカも同じか。

「どうやら、俺たちは神崎グループ本社の臨時職員として働くらしい」

そこには、契約書に署名した者を、神崎グループ本社秘書室特別臨時職員として雇用するというような内容だった。

「なるほど……契約でそういう風にするんですか」

俺たちが茫然としていると、椎崎さんが俺の書類を横から見て納得している。

「色々とありますので、そういう体裁をとらせていただいています」

それにしても、まさかこういう書類上だけでも、神崎グループの社員として働くなんて……。自慢できるかも。臨時だけど。就活には活用できないだろうな……。職歴にはならないだろうし。なったら、すげえ有利だよな。俺の才能はある程度保証されたようなもんだし、採用する企業だって、神崎グループの中核と面識のある人間を手に入れる事ができるんだから。

なあんて、そんなのに利用していいもんじゃないだろうし、そんな度胸はない。ヨシマサには自慢してやろうっと。

そんな邪(よこしま)な事を考えつつ、それ以降も読んでいく。

「……………冗談……か？」

「トールちゃん」

同じような速さで読んでいたら、同じ所で疑問に思うよな。

「これって、印刷ミスかな？」

「……………どうなんだろう？」

俺には判断できない。

俺たちが気になったのは、報酬の金額だ。そこには、大量のゼロが並んでいる。その数、七つ

。

金額は——一六〇〇〇〇〇〇〇円。

タイプミスじゃないだろうか。

こんな金額、プロスポーツの選手とか、芸能人ならわからんでもないが、こんな一介の学生に払うような額じゃない。

「ほお、結構な額だけど、危険な仕事だし、結構無難かもな」

椎崎さんは、その金額を見てもあまり動揺していない。

この人も、こんな大金が当たり前の世界の住人なのか。

「そちらは、あくまでも基本報酬です。ちなみに、源泉徴収などを除いた手取りの金額です」

「よかったじゃないか。そこから税金引かれたら、ちょっと淋しくなるもんな。それにしても、手取りか……」

椎崎さんが感慨深く書類を見る。

話の内容から、どうやらこれは打ち間違いや印刷ミスとかじゃないらしい。

一六〇〇〇〇〇〇〇円とか、宝くじとかだろ。

しかもこれが手取りだろ。実際は所得税なんかがあるだろうから、実際の報酬として支払われる額は、これよりももっと多いわけだ。その辺はよくわからないけど。

さすが大企業だ。こんな金額をあっさりと……。

「トールちゃん、すごすぎだよ」

「そうでもないぞ」

椎崎さんは、キヨカ言葉を否定する。

「確かに金額だけ見れば多いかもしれないが、これからの内容を考えればそうでもないぞ。なにしろ、命の危険と隣り合わせだからな」

「そうです。その金額は決して高くはありません。お二方は、これからの旅で命の危険がついてまわります。それを考慮すれば、安いかもしれませんが。命を金額に換算する事などできませんが、それでもそういう風に算出させていただきました」

会長さんの言葉は、何気ないものでも重く感じる。いや、内容はかなり重い。

「報酬とは別に、旅費としてお二人で一〇〇〇〇〇 s t e l o をご用意しております」

スーツの女性が説明を続ける。

「「……………」？」」

しかしその説明に、俺たちは揃って首を傾げる。

ステーク？ あれ？ 円じゃないの？ どこの国の単位だろう？ 聞いた事ないぞ。

その単位のせいで、それがどんな額かわからない。

「それって、俺たちの最初の旅の十倍じゃないですか」

なんだか椎崎さんが驚いている。それに加えて、なんだか羨ましそうにこっちを見る。この人がこんなに驚くような額なんだ。

う〜ん、椎崎さんの旅がどうかかわからないけど、この金額の十分の一でも旅はできるんだ。その十倍だから、やっぱり結構な金額なんだろう。

「そのくらいは必要でしょう」

「確かにそうかもしれませんが……。いいな、お前ら」

なんだか、椎崎さんが肩に手を置いてきた。

とにかく、はあ……と生返事しかできない。

「……単位がわからないってか。一 s t e l o は二五円だ」

俺たちがぼかんとしているのに気付いて、レートを説明してくれた。

一ステークが二五円で、一〇〇〇〇〇ステークは……………マジかっ！

「トールちゃん、すごい金額だよ」

キヨカも計算したらしい。報酬もそうだが、旅費も俺たちからすれば夢のような金額だ。現実味がない。

「あの……二五〇〇〇〇〇円って……本当なんですか？」

「少ないかもしれませんが、旅費に関してはとある方からの寄付によるものですので、その金額でやりくりしていただけますか」

いやいや、逆ですよ。多いんじゃ……。

そう思っても、なかなか口にはできない。

向こうが決めたんだし、それに反論するなんて、できるわけがない。

それに、使わなかった分は返せばいいわけだ。そうだよ、うん。

でも……それだけの金額が必要なくらい長期になるかもしれないんだよな。

「恵まれた旅かもしれないぞ。ちなみに、俺が初めて関わったのが、彼女と同じ歳の頃だったからな……。なんとかなるだろ」

俺たちは話に出てくる金額が、あまりにも俺たちの現実からかけ離れていて、パニック状態だ。

大人の世界って、こんななのか。金の感覚がおかしくなりそうだ。

「他に質問はございますか？」

スーツの女性にそう訊かれて、なんとか現実に戻ってくる。

「そうですね……特にはないです」

「わたしも大丈夫です」

質問なんて思い浮かぶはずがない。

そんな余裕があると思うか？

「そうですか。では、サインをいただけましたら、契約成立とさせていただきますね。この件に関しては、予測できない事が多々あります。その場合は、ここに記載がない場合でも、対応させていただきますので、ご安心下さい」

俺たちはとりあえずサインをする。ってというか、言われるままにするしかない。サインしないなんて、そんな選択肢は存在しない。

連帯保証人や金融じゃないんだが、こういう行為はなかなか心臓に悪い。

「それでは、こちらはお預かりします。申し訳ありませんが、本日はこれ以上はなにもしていただく事はありません。また、明日こちらにお越し頂けますか？」

あまりの事に、俺たちは茫然としたまま頷く。

「そうだ、宍神さん」

椎崎さんが口を開く。

「はい、なんででしょうか？」

「こいつらの荷物なんですけど、ここで預かってもらえたりしませんか？」

「……お荷物、ですか？ それはもちろん大丈夫です」

「そうですか。で、お前たちはどうする？ 今日必要なものがあるなら、それだけ別にして、他のはここで預かってもらえよ。また明日も来るのに、その荷物を持って帰って、また来るのは大変だろ」

それはありがたい提案だった。

正直、また持って帰って、明日来るのは大変だと思っていた。

「そうしましたら、お預かりします。必要なものがあれば、抜いて下さい」

そう言われるが、特に急に必要なものは入れていない。キヨカはどうなんだろう？

と、キヨカはなにか小さなポーチを出している。

「それでは、スーツケースはお預かりしておきますね。また明日、よろしくお願ひします」

スーツの女性は、深々と頭を下げる。

大人の女性にそんな事をされると、滅茶苦茶緊張する。

「何度もご足労頂く事になってしまい、申し訳ありませんでした」

さらには、会長さんにまで頭を下げられる。

おいおい、こんな大企業の会長さんが何度も頭を下げるなんて……あり得ないだろ。

逆に恐縮してしまって、どうしていいかわからない。俺もキヨカも、ただ茫然と立っているだけだ。

そんな俺たちを、椎崎さんがにやにやしながら見ている。

「じゃあ、今日はゆっくり帰って寝ろ。どうせ、昨日は緊張して、ろくに寝てないんだろ？」

凶星だ……。

「どうしてわかるんですか？」

キヨカが訊く。

「そんなの、見ればわかるだろ。隈(くま)がひどいぞ。どのみち、こんな状態じゃ旅に行かせられなかったぞ」

「すみません」

「ごめんなさい」

俺もキヨカも謝るしかなかった。

確かにこちらも準備不足だ。

「今日は、とりあえず寝る事。わかったか」

俺たちは同時に返事した。

「じゃあ、帰るか。宍神さんは、準備の方、お願いします」

「わかりました」

俺たちは、女性二人に見送られ、椎崎さんとエレベーターに乗り込む。

「冗談じゃなくな、本当に命懸けなんだ。だから、準備はきちんとなしなさいといけない」

エレベーターに乗り込むと、椎崎さんが唐突に話し始めた。

「俺たちの旅は、探し物の旅だったけど、お前たちの場合は、本当に闘いになる。その相手が蟲(ベステート)なんだから、予測不能もいいとこだ。楽な相手じゃないのは、もうわかってるはずだ。いくら蜘蛛(アラネーオ)の協力があるとはいえ、油断はできない。自分の身は自分で護るのは当然だが、お前は彼女も護らないといけないんだぞ」

背中を強く叩かれる。

「は、はい」

まだ実感はないけど、それはわかるつもりだ。前の時だって、後悔しまくった。だから繰り返さない。繰り返すわけにはいかない。

「まだわからないかもしれないけど、旅の早い内に理解しないと、後悔すらできなくなるぞ」

経験者の言葉だけに重い。

エレベーターが下に到着して降りるが、椎崎さんはもう一度戻る。

「ちょっと、俺は話があるんだ。じゃあまた明日な」

そう言って、また上に向かったので、俺たちは完全に取り残された。

大企業のフロアに学生二人。違和感ありまくりだ。受付の人は、俺たちを知っているからそんな事はないけど、なにかの用件で来訪している人たちの好奇の視線が痛い。

ここにいるのは、居心地が悪いただけなので、そそくさと帰る事にした。

俺もキヨカも眠い。

帰って寝よ。

俺とキヨカは、部屋に戻ると、ばたんと本当に倒れるように眠った。

帰りは荷物がなかったが、それでも暑さでかなり体力を奪われた。

荷物を預かってもらって正解だった。あれを持っていたら、本当に死んでいたかもしれない。そのくらい限界だった。

ああ、眠い。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

頭が痛い。

なんだか重い。

それに、節々が痛い。

もぞもぞと体を動かして、ゆっくりと目を開ける。

「ふあああ〜」

大きな欠伸(あくび)をしながら、体を伸ばす。

「よく寝た……」

頭に靄(もや)がかかったみたいぼんやりしている。

よっぽど疲れてたらしい。なかなかぐっすり眠った気がする。

カーテンからは、光が射し込んでいる。どうやら、夜ではないらしい。

昨日の事を思い出すが、帰って来てからの事はよく覚えていない。

「すぐに寝たんだっけ」

まだ少しだけぼんやりする頭で、なんとか思い出す。

帰ってきたのが昼過ぎで、そのまま寝たはずだ。

「まだ夕方なのか？」

日没が遅いので、結構遅くまで明るい。結構眠ったように感じるが、意外とそうでもないのか

。

そう考えつつ、携帯で時間を確認する。

「……………」

携帯には八月一日の午前九時と表示されている。

「……………マジ？」

携帯が壊れているはずもない。だとしたら、これは……。

サーっと血の気が引いた。

おいおい、やばいんじゃないか。

完全に遅刻だぞ。

のんびりと覚醒していた頭が、一気に醒めていく。

ガバッと勢いよく起きる。

あまり急に動きすぎて、一瞬目眩が……。

それでも、立ち上がる。

「やばいやばい」

とりあえず着替えないと。これからしないといけない事を考える。

荷物は向こうにあるはずだ。っていうか、預けておいてよかった。手ぶらなら、なんとか駅までダッシュして……。

と、そこまで考えて、自分以外にももう一人いる事を思い出した。

「キヨカ……」

着替えながら、キヨカが寝ている場所を見る。

「……………おいおい」

全身から力が抜ける。

キヨカは、ぐっすりと眠っていた。しかも、布団を蹴飛ばして。

「なんつう格好だよ」

だらしなく手足が変な方向にある。真っ直ぐじゃなくて、横を向いてるっていうか……。

一言で言えば——寝相が悪い。

「おいおい、これが女の子の寝姿かよ」

まあ、俺の場合は今更なんだが、普通の男だったら幻滅してるだろうな。まあ、世の中こんなもんだぜ。勝手な幻想はぶち壊せ。

「って、そんなのどうでもいいんだよ」

寝相とか、女の子への幻想とか、今はどうだっていい。それよりも大事なものは、現状をどうするかだ。

とりあえず、キヨカを起こさないと。

「おい、起きろ」

遠慮している場合でもない。つうか、そんな余裕はない。キヨカの体を思い切り揺する。

「おい、起きろって」

「ん、んんっ……」

もぞもぞと体を動かすが、どうも起きる気配がない。ごろりと横を向く。

「むにゃむにゃ……んっ」

……………ぽかーん。

起きる気配なし。

どうするんだよ。

このままだと、遅刻だぞ。

「おい、キヨカ。遅刻するぞ」

諦めずに体を揺する。

「おい、起きろよ」

「もうちょっと……」

反対側にごろりと向きを変える。

「どうすんだよ、これ……」

携帯で時間を確認すると、もう一五分経ってる。

「ここからだ、どう頑張っても無理だぞ」

今すぐ、ダッシュで駅まで行けば、乗り継ぎ次第で、ギリギリ間に合うかもしれない……いや、もう無理か。四五分じゃ難しい。

どうすればいい。

「……………電話はしとかないとな」

とにかく、遅れる事を連絡しておくべきだ。電話も入れずに、ただ遅刻するなんて、最低だ

よな。まあ、寝坊して遅刻なんだから、俺たちが全面的に悪いわけだが。

キヨカの事は諦めよう。

とにかく、電話を掛ける……が、ボタンを押す度に心臓がバクバクする。すっげえ掛けたくない。こんな電話は、きついぞ……。

それでも、なんとか番号を押し終える。

ああ、出ないで欲しい……。

矛盾してるのだが、わかってくれるはずだ。

ドキドキしながら、相手が出るのを待つ。

『どうかしたのか？』

コールすると、すぐに出てくれた。

「もしもし、おはようございます」

『ああ、おはよう。で、どうした？ もしかして、寝坊か？』

凶星。

いきなり核心ですよ。

電話の向こうでは、冗談のつもりで言ってるんだろう。なんだか笑い声が聞こえる。

「……………すみません」

ぺこりと頭を下げる。

『……………急げっ！ 今、どこだっ！』

いきなり大声での叱責(しっせき)に、電話から耳を離す。

「す、すみません。本当にすみません」

見えないのに、何度も何度も頭を下げる。

『謝るより行動しろ。今、どこだ』

うっわあ……。すっげえ、怒ってる。

まあ、当然なんだよな。俺たちは、この人たちと契約して、報酬までもらって、それで仕事としてしてるのに、いきなり遅刻だもんな。しかも寝坊。怒らないはずがない。

でも、なんだかこれまでの雰囲気、この人が怒るところが想像できなかったから、余計に堪える。

これから、大学を卒業して、いずれは社会人として働くってのに、こんなじゃ社会人失格だよな。学校だったら、遅刻しました……で、講義が受けられなかったりのペナルティくらいだけど、会社だったらそうはいかない。

「本当にすみません。今はまだ家です」

正直に答える。ここで誤魔化しても、なにもいい事はない。嘘で塗り固めるわけにはいかない

。

『わかった。とりあえず、急いで来るんだ。蟲(ベステート)は待っちゃくれないんだぞ』

「……はい」

その通りだ。相手は蟲(ベステート)。こっちの都合なんて、通用するわけがない。

『できる限りの最速で来るんだぞ』

「……はい」

少し優しい声で言われると、涙が出そうになる。

「急いで向かいます」

『世界は待ってくれないぞ』

「……はい」

俺が返事をする前に、電話は切れていた。

こりゃ、急がないとな……。

そのためには、キヨカだよな。

俺だけならともかく、キヨカがいるとなると……。

つうか、どうしてこいつは起きないんだよ。俺も言える立場じゃないけどさ。

とにかく、起こさない事には始まらない。

「おい、起きろよ」

もう一度、キヨカの体を揺する。

もういっそ、ゴロゴロと転がしてやろうかと思うが、思うだけだ。

「おい、キヨカ」

蹴飛ばすわけにもいかないしな……。逆の場合だと、こいつは容赦なくやりそうだけど。

どうしたものか。

暴力的な事はまずいしな……。かといって、優しく起こすのは効果がない。

「こうなりゃ、しょうがないな」

こりゃ、強行手段かな。

えいっとキヨカの鼻をつまむ。

「ん、んがっ、はう」

苦しそうにしているが、口で呼吸できるので、起きる事がない。

「ここまでしても起きないのかよ」

凶行手段かな。

「起きろよ」

呟いてから、キヨカの口も指でつまむ。

「んっ、んんっ、んんんっ」

キヨカの体がびくんと跳ねる。そして、くわっと目を見開いて体を起こす。

その勢いでつまんでいた指が外れる。

「がはっ、ごえっ、ごっ、がっ、はっ、ごはっ」

盛大に咳きこんで、荒い息を続けている。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……………」

体を起こした姿勢のまま、肩を大きく動かしている。

まあ、あそこまですれば起きるよな。起きなかったら、そのまま永眠だしな。

「やっと起きたな」

そういった瞬間、キヨカの拳が飛んできた。

「おっと」

ギリギリでかわしたが……、第二撃が直後に……。

「がっ」

初撃を避ける事まで計算して、その避けるであろう場所を的確に狙ってきやがった。

寝起きにできる芸当なのか？

「殺す気？ 私を亡き者にしようとした？」

キッと睨みつけられる。

「私を殺して、他の女とナニする気だったわけ？」

……おいおい、どういう展開だよ。

「別に、殺すつもりなんかあるか。つうか、どんな発想してるんだよ。そもそも、俺とキヨカは、そういう関係じゃないだろ」

「トールちゃんは遊びなんだね。私を弄んで、ボロボロにして、そして飽きたらポイって捨てちゃうんだ。およよ……」

わざとらしく、しなをつくっていやがる。

ってというか、寝起きでよくこんな事までできるな。世の中には、低血圧とかじゃなくて、どうしてもずっと起きる事が難しい病気(起立性調節障害)の人だっているのに。寝起きでこんなにテンションが高いと、バセドウ病とか疑うぞ。

「お前な、なかなか起きないからだな……」

「寝込みを襲おうとしたの？ 夜這い？」

「黙れ。……っていうかな、こんな事してる場合じゃないんだよ」

「誤魔化そうとしてるう」

くねくねと体をひねって、しかも指をくわえている。

まあ、人によってはセクシーに見えるんだろうが、キヨカだしな……。

「そんなんじゃねえっ！ つうか、時計を見ろ」

こいつのペースに巻き込まれるわけにはいかない。携帯の画面を目の前に突きつける。

「……………ほえ？」

キヨカはぽか一んと口を開け、目の焦点が合っていない。

キヨカがまさに面食らったような、鳩が豆鉄砲をくらったような顔ってのは、きっこうだろうな……という感じの、模範的な顔をしている。ぽか一んと開けた口がだらしないが、気持ちはよくわかる。

「遅刻確定だ」

現実を突きつけてやる。

「……どうして？」

「ん？」

小さな声だったので、聞き取れなかった。

「どうして……………」

瞬間、キヨカの周囲の空気が変わる。

やばい。

直感だった。

もう、第六感ってやつだろう。

身構えようとしたが、間に合わなかった。

「がっ！ ごほっ！」

キヨカの拳と、続いて足が……。

額と腹が痛い。つうか、どうして急所を狙おうとするんだ。殺意もないと信じたい。

痛みでゴロゴロと床を転がる。

「どうして、もっと早く起こしてくれないのよ」

怒声が追い打ちをかける。

「……がっ、お前が……起きなかったんだろうが。俺は何度も起こしたぞ」

「無能め。言い訳なんて必要ないの。むしろ見苦しい」

うわっ、なんつう正論だ。

確かにそうかもしれないけど、キヨカに言われるときつついな……。こいつには、言われたくないぞ。

「とにかく、さっさと着替えろよ」

「トールちゃんのスケベ。いきなり脱げだなんて……」

体の前で腕を組んで、胸を隠すようにする。

だあかあああ……そんな事してる余裕はねえんだよ。

「遊んでる時間はないんだって。とにかく、急ぐぞ」

「……はあい」

しおらしくなりやがった。

これはこれで調子が狂うな。

「トールちゃん、出てけ」

ぼそりと低い声が。

「ん？ なんだ？」

「出てけ」

訊くと、またぼそり。

「どうしたんだよ」

ぴりっと空気が変わった。

「着替えるから、出てけっての」

「うおっ」

枕が飛んできた。

ぼふっと受け止める。

「着替えるから、出てって！」

枕以降、物は飛んでこなかったが、キヨカの大声が飛んできた。

「す、すまん」

とりあえず、ダッシュで部屋を出る。

「ったく……」

枕を持ったまま外にいるのは、どういう罰ゲームなんですか？

寝坊の……なら、むしろキヨカだろう。

それにしても、暑いな……。

今日も蒸し蒸ししている。

まだ朝だなのに、こんなに暑いなんて……。

今いる場所は、日蔭だからいいものの、直射日光に当たったら溶けてしまいそうだ。

まだまだ序の口のはずなのに、既にバテかけていると、

「終わったよ」

なんの前触れもなく、しかもかなりの勢いでドアが開いた。

「うわっ」

枕を持っていなかったらどうなっていたかわからない。それでも、衝撃で数歩下がってしまう

。

おいおい。マジで危ないだろ。

「トールちゃん、さっと行くよ」

ドアからは、ひょっこりと笑顔のキヨカが。

俺はといえば、枕に命を救われている。

なんだ、この状況。

「なに、ボケっとしてんの？ 急がないとなんてしょ」

「あ、ああ」

そうなんだが、この理不尽さはなんだろうな。不条理だな……。

そんな事をうじうじ考えてるわけにもいかない。早く行かないと。遅刻は確実だが、それでもゆっくりしていいわけじゃない。

「急ぐぞ」

部屋に入って、枕を戻して、火の元と戸締まりを確認する。もちろん、指さし確認。しばらく……どのくらいになるかわからないけど、戻ってこれないからな……。

しばらく、この部屋ともお別れか。できるだけ早く帰ってきたいな。でないと、大学の単位がやばい。留年とか、マジで勘弁だぞ。

「トールちゃん、急ぐよ」

「ああ、わかってる。きちんと戸締まりしておかないとな」

「そうだね。しばらく無人だもんね」

なんだか、しんみりしてきちゃったな……。

ただの賃貸の部屋なのに、こうしていると感慨深い。

「さてと、それじゃ行くか」

「そうだね」

俺は手ぶらだが、キヨカは昨日のポーチを持っている。荷物を預けておいてよかった。これで

大荷物は無理だろう。

「じゃあ、ダッシュだね」

言うが早いか、キヨカはダッシュ。

「おい、待って」

とりあえず施錠を確認して、キヨカを追いかける。

溶けてしまいそうな日差しの中、俺たちは駅に向かってダッシュしていた。なんだか、青春だな……なんて、少しだけ現実逃避をしながら。

現実はただの遅刻だから、考えたくない気持ち……わかるだろ？

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

駅に到着したわけだが……ギリギリで電車を逃してしまった。

「トールちゃんが遅いからだよ」

「……………俺のせいだよ」

ホームで倒れそうになりながら、呼吸を整える。

確かに、切符を入れる時に手間取ったけど、そのせいというのは横暴じゃないか？

まあ、気持ちはわかるけど。

「この次って、どのくらい？」

「すぐに来るさ」

田舎に住んでいた頃は、電車を一本逃すと、次は数一〇分後だったんだが、さすがにこのあたりは数分だ。もうすぐ次の電車が到着する。

「だったらいいんだけど……」

キヨカも呼吸を整えている。

二人して汗だくなのだが、ハンカチ程度じゃ意味がない。

タオルを持っていた方がよかったかもしれない。滝のような汗が止まらない。汗だくになりながら、息を荒くしている俺たちは、周囲から完全に浮いている。

俺たちみたいに私服で、遊びに行くような雰囲気の人たちもいるが、スーツ姿の人たちが多い気がする。

社会人は夏休みじゃないもんな。

そんな事を考えていると、電車が到着した。

ドアが開くと、ひんやりした風と一緒に、わらわらと人が降りてくる。少しだけ空いた車内に、今度は駅にいた人たちが乗り込んでいく。俺たちも、その流れに身を任せるように乗り込む。

ひんやりとしているのだが、ぎゅうぎゅうに詰め込まれた状態では、蒸し風呂のような感じだ。

「トールちゃん……苦しいよ」

キヨカは人の間になって、潰されそうになっていた。

「なんとか頑張れ」

俺にはどうしようもない。助けようにも、俺とキヨカの間には人がいて、こうして話すのも難しいくらいだ。

乗り換えの駅はわかっているはずなので、大丈夫だろう。それに、そこでの乗り換えが多いはずだから、出れないという事もないはずだ。

それからしばらく、鮎(すし)詰(づ)め状態が続いた。

これでもか……という車内に、駅毎に人が乗り込んでくる。これには、大学に入った当初は驚いたが、すぐに慣れてしまった。こういうものだとは割り切るしかない。

どれだけすぐに次の電車が来るとはいつても、やはり今来た電車に乗りたいと思うものだ。どうせ、次の電車も同じような状況だし。

ぎゅうぎゅう状態が、ふっと弛(ゆる)んだ。

同時にどっと人が動き出す。

気付かなかったが、どうやら目的の駅らしい。暑さにやられて、アナウンスを聞き逃してしまった。

「キヨカ、降りるぞ」

「……うん」

少し離れた場所から声がした。しかし、姿は見えない。

とにかく降りないと。

人の波に押し出されるように降りる。よろよるとなりながらも、その流れから抜け出る。

キヨカはどこだろう……。

ホームを見ると、よろよるとふらつきながら、キヨカが歩いているのを見つけた。

「おい、キヨカ、こっちだ」

「あ……トールちゃん」

視線が定まっていなくて、ふらふらしながらこっちに歩いてくる。

寝起きにダッシュして、しかもこれだもんな……。なかなかの仕打ちだ。

「キヨカ、急ぐぞ。乗り換えだ」

「……うん」

路線が変わるので、ホームを移動する。なんだか、スーツ姿の人たちが向かうのと同じ場所だからな……。基本的に混雑している。しかも、他の路線からの人が合流するので、むしろ増えている感じさえする。

「トールちゃん……疲れたよ」

「俺もだ。でも、ただでさえ遅刻してるのに、休んでるわけにはいかないだろ」

「……そうだけどお」

キヨカは甘えるような声で言う。俺だって休みたいさ。これが学校だったら、少し休んでるかもしれない。

でも、今回はそうはいかない。なんたって、相手はあの神崎グループだぞ。紫藤(しどう)グループ、アビリティ・ムーンとで、日本三大企業と称される企業だ。その会長と直接交わした契約だぞ。それを、こうしていきなり遅刻って……。いきなりクビにされても、なんの文句も言えない状況だ。

「キヨカだってわかるだろ？ 遅れるってだけで大事なんだよ」

「……………うん」

か細い声だったが、わかってくれたようだ。もっとも、わかっているけども休みたいて気持ちはわかる。

倒れてしまいそうになりながらも、人の波に流されるように進んでいく。勝手に動いてるみたいなもんだ。

「キヨカ、大丈夫か？」

よろよるとしながら訊くが、返事はない。

もしかして、どこかで倒れてるんじゃないか……と思って見ると、ちゃんと歩いている。どうやら、話す気力がないだけらしい。俺もかなり厳しいな。

なんとか乗り換えのホームまで到着。

ちょうど電車が到着したので、そのまま乗り込んだ。ここで待たされるのは辛かったので、ちょっとだけでも助かった。それに、時間を無駄にせずにすんでよかった。

詰め込まれるように電車に乗る。相変わらず人でいっぱいだ。

「トールちゃん……」

隣からか細い声。どうにか離れないようにしないとな。

「どうした？」

「なんかもう疲れたよ……」

「同感だ」

俺もキヨカも限界だった。これだと、昨日とあまり変わらないんじゃないか？ 充分眠ったけど、ダッシュしまくって、そこに満員電車だもんな。一気に体力を奪われる。

「ちょっとでも早く着かないと」

「……うん」

時計を見ると、約束の時間はとっくに過ぎている。ここから神崎グループ本社ビルまでは、徒歩も含めると二〇分は掛かるだろう。その大半は電車なんだが。こればかりは、早くする事ができない。

もう一度乗り換えがあるので、その接続次第で大きく変わる。こんな満員状態じゃ休めるわけもないんだが、少しでも体力を回復しておかないと。

キヨカもそれはわかっているようで、ゆっくりと呼吸をしている。キヨカもじいさんの訓練を受けてるからな。普通よりはこういう状況に強いはずだ。そうでなきゃ、あれだけ走れないだろう。俺だって、特に足が速いってわけでもないけど、それでも平均以上だと思う。そんな俺が、全速力じゃないと追いつけなかったんだからな。

駅までのダッシュ時間を思い返す。それだけ体力があるなら、これからも大丈夫だろう。なんとなく危険なのはわかる。蟲(ベステート)相手だから、完全な素人には難しいだろう。

それを考えると、鍛えてくれたじいさんには感謝しないとイケないな。

絶対に口に出せない感謝を心の中で呟いていたら、目的の駅に到着した。

「キヨカ」

「うん」

満員電車だったが、しばらく休んだお蔭で、なんとか通常くらいには体力が戻ってきた。今からダッシュとか言われたら無理だけど、これくらいなら問題ない。我ながらタフだな。

電車を降りて、次のホームへ向かう。

やっぱり、わらわらと人の流れはあるものの、さっきよりは少なくなっている。俺たちの体力も戻ってきているので、それもあるのかもしれない。

ホームに着くと、どうやらすぐには来ないらしく、ここで五分ほど待つ事に。

「トールちゃん、大丈夫かな？」

「ん？」

なにが大丈夫なんだ？

「遅刻だよ。怒られないかな」

「怒られるだろうな。でも、もうしょうがないだろ」

「だよ。……」

どうやら電車の待ち時間で落ち着いて、ようやく考える余裕ができたらしい。

「だから、できるだけ早く行かないとな。遅れたからって、いくら遅れてもいいわけでもない」

「わかってるよ。とにかく、まずは謝らないとだよ」

「そうだな」

そんな会話をしていると、電車が到着した。

まだしばらく電車で揺られる事になる。

「もうすぐだね」

「ああ」

幸い、電車は空いていたので、なんとか座る事ができた。

「ふう～」

椅子に座ると、思わずため息が出る。

「疲れたね……」

キヨカもくつろいでいる。

思ったよりも疲れていたのか、こうして揺られていると眠ってしまいそうになる。

このまま寝るわけにはいかない。ここで寝過ごしたとか、洒落にならない。

「トールちゃん、なんだか眠い」

「おい、寝るなよ」

「着いたら起こしてよ」

「莫迦、もうすぐ着くっての」

「眠いよ……」

「寝るなっての」

これ以上は、他の乗客の迷惑になる。

かといって、このままだとキヨカはマジで寝てしまうだろう。

どうしたものか……とっていると、目的の駅に到着した。

「キヨカ、降りるぞ」

「もう着いちゃったんだ」

残念そうに言うなよ。

「ここからは、またダッシュだからな」

ここからは、俺たち次第で時間を短縮できる。できるだけ早く着くためには、走るしかない。

電車のドアが開くと、俺たちは人混みを掻き分けて走る。

なんだかんだいって、キヨカの体力もすごいな。

エスカレーターはもどかしいので、階段を駆け降りる。他の乗客は、エスカレーターを利用す

るので、階段は人が少ないのがいい。

「キヨカ、大丈夫か」

「私は大丈夫。トールちゃんこそ、大丈夫？」

「俺だって、じいさんに鍛えられてるからな」

「そうだね」

そんな会話をする余裕ができたんだな。

改札を抜けて、広々とするとスピードを上げる。

走りながら、電話を取り出して、椎崎さんに電話を掛ける。

いきなり到着するとかは失礼だろう。事前に連絡しておくべきだ。そう判断した。

「もしもし」

すぐに相手は出た。

『遅刻魔か。どうした？』

遅刻魔はどうなんだ？ でも、そう言われてもしようがないか。

「もうすぐ到着します。今、そっちに向かって走ってます」

目の前には、巨大なビルが見えている。目的のビルだ。

『そうか。じゃあ、下で待ってるわ。俺も気分転換したかったんだ』

なんだろう？ もしかして、待たせすぎて……。

「すみません。もう見えてますので、すぐに着けると思っています」

『了解。そっちが先だったら、受付の所で待っていてくれ』

「はい……」

と、俺がそう言う前に電話は切れていた。

まあ、そんなのは別にいいんだ。とにかく急がないと。

「トールちゃん、ラストスパートだよ」

「おうよ」

俺とキヨカは、スピードを上げる。こんなに走るのって、いつ以来なんだろうな。学校でもこんなに走る事なんてないよな。

暑いとか言ってもらえない。汗が滝のように流れている。シャツが汗でベタベタだ。そういや、着替えはスーツケースの中だったか。着いたら、着替えさせてもらおうかな。そのくらいはいいよな。

マラソンをしているような気分になってくる。

俺とキヨカは、歩道を歩いているスーツ姿の人たちを避けながら、ひたすら走っていく。

そして、ついに入り口が見えた。

「……もうすぐだ」

「やったね」

遅刻しているんだってのも忘れて、ただその場所に到着する事だけを考えていた。

「とうちゃくう～」

キヨカが先に到着した。が、自動ドアが開かずにそこで止まる事になる。

さすがに、このまま突っ込むわけにはいかない。

ワンテンポ遅れて自動ドアが開く。俺はそのタイミングに合ったので、そのまま走っていく。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

「よっ、遅かったな」

そこには、椎崎さんが立っていた。

別に怒っているわけでも、笑顔で怒ってるわけでも、呆れているわけでもなく……普通に、昨日と同じようにそこに立っていた。

「出発の初日に遅刻とは、なかなかの大物だな」

椎崎さんは、心底面白そうに笑っている。

「あの……ごめんなさい」

キヨカが深々と頭を下げる。

「本当にすみませんでした」

俺も謝罪する。

まずはそこからだ。

やってしまったものはどうしようもないかもしれないけど、反省もせず、謝罪もしないというのは問題だ。

「本当に、本当に、遅れて申し訳ありません」

「おいおい、そんなにしなくてもいいって。……まあ、上に行ったら、とりあえず謝っておけばいい。俺も、璃織魚さんも宍神さんも、怒ってるわけじゃないからよ」

安心したか……と肩を叩かれる。

ふう～。

よかった……。

気休めかもしれないし、俺たちを気遣ってるのかもしれないけど、嘘でもそうだと行ってくれただけで、心が軽くなった。それと同時に体から力が抜ける。

「とりあえず、行くぞ」

椎崎さんはそう言って、エレベーターに乗り込む。

俺たちも続いて乗り込む。

エレベーターに乗って、ドアの方を見た時、受付辺りにいた他の人たちが、不思議そうにこっちを見ていた。

そりゃそうか。いきなり学生風情が走ってきて、いきなり謝って……。奇妙だよな。まさかこんな場所にバイトとかないだろうし。

ドアが閉まって、視線がなくなった。

エレベーターが上昇していく。エレベーターの中は無言だった。もっとも、俺たちは謝る以外の言葉はなかったし、雑談するような雰囲気でもない。それに、すぐに到着したのもある。

目的の階に到着し、椎崎さんが先に降りる。それに続くように俺たちも降りる。

昨日も来た場所だ。

そして、昨日と同じ部屋の前。

椎崎さんはノックをし、返事を待たずに中に入った。

俺とキヨカは顔を見合わせてから、失礼します、と言って入る。

部屋の中には、昨日と同じく、スーツ姿の女性と、会長様がいた。

「申し訳ありませんでした」

「遅れてしまって、ごめんなさい」

俺とキヨカは、部屋に入るとすぐに頭を下げる。

「そうね。決められた時間に遅れるという事は、多大な損失を相手に与えるという事です。一分の遅刻で、計り知れない損失を与える事もあります。これは金銭だけの問題ではありません。ましてや、今回の事は、世界の命運が懸かっています。その事で、滅んでしまう世界があるかもしれません。その事を十分に理解していますか？」

スーツ姿の女性が、淡々とした口調で言う。俺たちは、頭を下げたまま、黙って言葉を浴びていた。その言葉が槍のように突き刺さろうとも、非は俺たちにあるんだから、甘んじて受けないといけない。

「もっとも、理解していればこのような事はないと思いますが」

ちくりと追加される。

もう、心臓が痛い。このままどこかに埋められても仕方ない。

怖いからなんだろう。自然と手足が震える。ガクガクとした手足を止めようと思っても、どうしたら止まるのかがわからない。

ちらりと横目でキヨカを見ると、キヨカも同じらしく、こちらを見ていた。

目があったキヨカは、どこか安心したようだったが、その表情は今にも泣き出しそうだった。

「それでは、今回の遅刻に関してですが――」

俺たちはゴクリと唾を飲み込む。

なんだろう。なにを言われるんだろう。

命は取られないよな。

報酬の減額だったら、別に全然構わない。

今回の事がなかった事にされるとか？

もう、どうなるのか、心臓がバクバクなっている。

「――不問とします」

一瞬、心臓が止まったかと思った。

そして、次の瞬間、なにを言われたのか理解できずに、頭が真っ白になる。

「あ、あの……」

キヨカが、少しだけ顔を上げて質問する。

「なにか？」

向こうはどんな顔をしてるんだろう。とてもじゃないが、直視する事ができない。

「今、私たちを、その……どうなっちゃうのかって……」

混乱しているのか、要領を得ないようだ。

俺だって、なにがどうなってるのかわからなくなっている。

「なにか不満でもありましたか？」

「えっと……その……あの……」

「不満があるようでしたら、なにか罰則を考えますが」

「ええと……あの……ありがとうございます」

隣でキヨカが今まで以上に深々と頭を下げる。

「宍神さん、本当にSですね。こいつらが可哀想ですよ」

「そうですよ。今のは少し……」

なんだか、俺たち以外は和やかなんだが……。

「そうですか？ ほら、二人とも、別に怒ってもいませんし、なにも罰を与えようとも思っていないから、頭を上げなさい」

そう言われて、すぐにそうできるわけがない。

頭を下げたまま、キヨカと視線を交わす。

(どうする?)

(いいんじゃないのかな?)

(だけだよ……)

(このまま、こうしてたら怒られそうだし)

(そうだな……)

視線でそんな会話が行われる。

俺たちは頷いて、同時に頭を上げる。

それでも、なんとなく前を見るのが辛い。

「おはようございます」

ゆっくりと視線を向けると、にこやかな笑顔が飛び込んできた。

「「……………」」

俺たちは、未知のものでも見たかのように、なにがどうなっているのかわからない。

「おいおい、挨拶はきちんとしろよ」

椎崎さんが、からかうように言う。

「社会人としても、学生としても基本ですよ」

笑顔の本人――神崎グループの会長様が、笑顔を俺たちに向けている。

「お、おは、おはよう、ございます」

なんとか、その言葉を口にする。

「お、おは、おひゃ、え、あっ……おひゃよう、あれれ、おはようごじゃいましゅ」

キヨカは口が動かないようで、何度も噛みながら、最終的にも噛んだが、なんとか言えたという事にしておこう。

「はい、おはようございます」

会長様はぺこりとお辞儀をする。

俺たちも慌ててお辞儀をした。

「もうちょっとリラックスしていいぞ」

「椎崎さん、あなたのようにできる人は少ないですよ」

「そんなものですか？」

「そんなものです」

椎崎さんとスーツ姿の女性がにこやかに話している。

「遅刻は本来でしたら赦し難いものです。しかし、状況が特殊だという事もありますし、そもそも失敗や間違いは誰でもします。そればかりを咎める事はしません。これから、同じ過ちがないように気を付けて下さい」

神崎会長様直々の言葉だ。

グサグサと心に刺さっていく。

「はい、申し訳ありませんでした」

何度でも謝ろう。

「それにしても、宍神さんのあれは、きつついですね。むしろ、あれが罰じゃないかってくらいでしたよ。俺も、かなり痛かった……」

「そうですか？　そういうつもりはなく、社会に出る前にきちんと身に付けておかねばならない事ですし、そもそも常識的な事ですので」

「それはそうですが、なかなか緊張感のある言葉でしたね。こちらも、改めて身が引き締まる感じでした」

「そんな……璃織魚様まで……」

相変わらず、俺たち二人以外は、和やかに談笑している。なんだか、緊張しているのが変な感じだ。

「全く気にしないのも問題だが、あまり気にするな。今日はしょうがないさ。それに、これから大変な目に遭うだろうし」

椎崎さんがケタケタと笑っている。

「椎崎さんも意地悪ですよ」

「璃織魚さんが優しいんだと思いますよ」

「そんな事はありませんよ。厳しくしているつもりです」

「それが優しいんですよ。そもそも、厳しくしているのは、自分に対してだけでしょ」

やっぱり、椎崎さんはただ者じゃないよな。日本有数の大企業の会長に、こんな軽口をたたけるなんて……。他にいないだろう。

「このままでは、話が進みませんので、椎崎さんを見殺しに続けます」

「そりゃないでしょ」

「お二人には、昨日説明したとおり、蟲(ベステート)を封印するために、世界を旅していただきます」

スーツ姿の女性は、本当に椎崎さんを見殺しに話す。

「昨日お預かりしていた荷物は、そちらに用意してあります」

入り口の脇を指す。そこに俺たちの荷物があった。

「これから、旅をするにあたり、必要と思われる旅費をお渡しします。大切に使って下さい」

そう言って、薄い折りたたみ式の財布をそれぞれ渡される。

ん？

どう見てもぺらぺらだ。キヨカも不思議そうにそれを見ている。

確か、結構な金額を昨日言われた気がするんだが……。

まさか、クレジットカードなのか？ それとも、プリペイドカードなのか？ どちらにせよ、いろんな世界に行くなら、どこでも使える共通のものじゃないと意味ないよな。昨日は、なんとかって単位だったけど、それって日本じゃ使えないし……。

「心配するな。中を開けてみればわかる」

不安そうな俺たちを見て、椎崎さんが声を掛ける。

とにかく開ければわかるらしいので、俺たちは顔を見合わせてから開ける。

中には札入れの部分と、ホック式の小銭入れの部分と、カードが入るようになっている部分とに分かれている。

結構、普通の財布だな。

しかし、札入れの部分にも、小銭入れの部分にも、カードの部分にもなにも入っていない。

キヨカも自分の財布を見てから、俺の財布を覗き込むようにして見る。

俺と同じように不思議に思ってるんだろう。

「その財布は、h a r m o n i o (ハーモニーオ)のみが使う事ができるようになっています」

会長様が説明して下さったのだが、聞き慣れない単語があって、理解不能だった。

なんとかだけが使える財布？

どうやら、不思議アイテムだという事だけはわかった。

「あの……私たちは使えるんですよね」

キヨカが恐る恐る質問する。

「もちろんです。使えないものをお渡ししませんよ」

にっこりと会長様が答えてくださった。

「でも、そのなにかにしか使えないって……」

「h a r m o n i o ですか。……そういえば、厳密にはh a r m o n i o ではないのですか」
会長様は隣にいたスーツ姿の女性に訊く。

「厳密には異なりますが、内容はほぼ同じでしょう。ね、椎崎さん」

今度は椎崎さんに話を振る。

「まあ、俺たちだけがh a r m o n i oってわけでもないし、世界を調律するのなら……同じかもしれないけど、結局名称だけですし、いいんじゃないですか？」

「意外ですね。椎崎さんが一番拘られるかと思ったのですが」

「広い意味では同じようなものですし、この二人に使う事ができるわけですし、説明だけならどういふ事でもいいんじゃないですか。どうせ、わかってないみたいですから」

なんだか三人で呼称についての話になっているようだ。正直、どうでもいい事なんだけどな……。とにかく、俺たちに使えればそれでいいや。

それよりも、中身がないってのが気になるんだが。

「すまん。とにかく、お前たちは普通に使える。しかし、他の人間に使う事はできない。この中なら……俺と璃織魚さんは使えるけど、宍神さんは使えないってわけだ」

えっ？ と驚く。

椎崎さんたちは使えるのに、スーツ姿の女性——シシミさんというらしい——は、使えない？

でも、用意したのはこの人なんじゃ……。

「ちょっと変わったアイテムなんだよ。詩稀の能力で作られてるんだ。そんな出自はどうでもいいだろ。とにかく、使い方を教えておく」

俺たちは頷く。俺としても、どういう作りなのかというのは気になるが、今はどうでもいい気分だ。

「財布を広げると、右に小銭入れ、左にカード入れがあるだろ」

俺たちは財布を広げる。さっきも見たからわかるが、確認せずにはいられない。

「そのカード入れの上の方に、なにか見えないか？」

カード入れ部分は、少しずつ段差になっていて、入れたカードの頭が見えるようになっている。それが全部で四つあり、その一番上の段が見える場所になにか数字が浮かんでいるのが見えた。

「あっ」

キョカも見つけたようで、声を上げる。

「見つけたようだな。そこにある数字はわかるか？」

俺たちはそこにある数字を見る。

数字は二段になっていて、上の段には`五〇〇〇〇、とある。下の段には`一二五〇〇〇〇、という数字があった。

別にモニターがあるわけじゃない。ぼんやりと浮かんでいるような感じだ。かといって、読めないというわけじゃない。なんだか、財布から数字が飛び出して見えるような感じだ。

「見えました」

「そうか」

椎崎さんが頷く。

「その上の方が、その財布の全財産だ。単位は`s t e l o、な。下の段が、今いる世界での金

額だ。今はもちろん「円、だ」

なるほど……。

俺とキヨカは大きく頷く。

五〇〇〇〇steloって事は、俺とキヨカの財布には、昨日提示された金額の半分ずつが入っているらしい。

……ん？ ちょっと待てよ。入っているらしいのだが、見たところそれらしいものがない。ここには、一二五〇〇〇〇円が入っているはずだ。それなのに、それらしいものがないってのは変だ。

「その金額に注意しておく事。世界によって物価が違うから、使いすぎたり、使いきったりしないように。無尽蔵じゃないんだからな」

それは気を付けた方がよさそうだ。現物がないから、金銭感覚がわからなくなるだろうし、世界が変わればレートも違うだろうから、たくさんあるように思えても、足りないって事が起こりうる。

「それで、金の出し入れだが……」

ようやく俺たちが気になっていた部分だ。ごくりと唾を飲む。

「出したい金額を思い浮かべながら、財布を開いてみる」

へっ？

なんだか、予想外な言葉に調子をずらされる。

とにかく、俺たちは一度財布を閉じる。そして、とりあえず一〇〇〇〇円を思い浮かべて、再び財布を開く。

「……………マジ？」

財布を広げると、札入れの中になにかが入っていた。

札入れの中を確認する。

なんだか妙に緊張する。

「……………入ってる」

キヨカの方を見ると、キヨカも同じだったらしく、一〇〇〇〇円札を手にして、こっちを見ている。

「よし、大丈夫そうだな。財布の数字を確認してみな」

そう言われて、俺たちは財布を見ると、上の段が「四九六〇〇」になっていて、下の段が「一二四〇〇〇〇」になっている。

「「おおっ」」

同時に声を上げる。

財布から出した分だけ、ちゃんと減ってる。

「そういう事だ。お金を財布に入れて、閉じてみる」

言われた通りにする。

「もう一度、なにも金額を思い浮かべず開いてみる」

俺たちはもう一度開く。

「「おおっ」」

また同時に声を上げる。

財布に浮かび上がっている数字は元に戻っていた。そして、札入れの中にはなにもない。

「どうなってんだ？」

ぼそりと呟かずにはいられなかった。

「まあ、原理は不思議な力って事にしておこう。科学的には証明できないから。とにかく、これで使い方はわかったろ。もちろん、なんらかの報酬を得た場合は、財布に入れればその分も入るからな。その財布に入る金額に上限はない」

ずびしっ！ と音が聞こえるくらいの勢いで指される。

「椎崎さんが説明してくれた通りです。決して無駄遣いのないようお願いします」

シシミさんが最後にもう一度言う。

「わかりました」

「大事に使います」

俺たちは財布をそれぞれのポケットに入れる。

「大事にしろよ。大金が入ってるって事を忘れない事。それと、盗まれたとしても、他の奴には使えない。むしろ、一見すれば空の財布だからな。だからといって、奪われていいものじゃない。失くしていいものじゃない。わかるよな」

「「はい」」

俺たちは同時に返事をする。

確かに他の人に使えないなら、盗られても大丈夫だとは思えない。盗んだ人は使えないかもしれないけど、俺たちの所持金が減った事に変わりはないんだ。

「これで、渡すものは全部ですか？」

椎崎さんがシシミさんを見て確認する。

「そうですね。……時計は必要ですか？」

シシミさんが俺たちを見る。

「時計……ですか？」

「はい。その世界の時間を表示してくれますよ」

時計か……。

どうしようか。俺はキヨカの意見を聞こうと、キヨカを見る。

おわっ。キヨカもこっちを見ている。キヨカも俺にかよ。まあ、そうだよな。

「キヨカ、どうする？」

「私はなくてもいいような気がする。どうせ、時間に縛られる旅でもないし」

なるほど、そういう考えか。

俺は、あった方がいいような気がしたが、別に何時にどこへ行けというようなものでもない。それに、交通手段を利用する事があっても、そういう世界なら時計くらいはあるだろう。だったら、別になくてもいいのかもしれない。考えてみれば、普段もそんなに時間を見ているわけじゃない。こうして、約束があれば見るくらいだ。ないと必要そうに思えるけど、実際に持ってい

ればそれほど必要としていないのかもしれない。

「そうだな。別になくても大丈夫そうだ」

「どうやら話はまとまったみたいだな。時計はいらぬのか」

と、椎崎さんを見ると、その手には金色の懐中時計があった。どうやら、時計というのはその事らしい。

「はい。別になくてもいいです」

そう告げると、椎崎さんはにこりと笑った。

「そっか。まあ、俺たちも旅の途中にそんなに見たわけじゃないしな。世界を移動した時くらいだったし、なくても不自由はなかったし。そうだな、必要ないと思うならそれでいいさ」

旅の先輩である椎崎さんがそう言うならそうなんだろう。

「お気遣いありがとうございます」

「いやいや、そういうんじゃないぞ。この時計は、それなりに面白アイテムだからな」

うっ、なんだろう。気になる。どんなアイテムなんだろう？

「まあ、必要ないならいいさ。ただ、その世界の年代と時間が表示されるってだけだから」

意外とあっさりと教えてくれた。訊いてないのに。なんだか、意地悪じゃないけど、そういうのってわざと教えてくれないような気がしたのに。ちょっと拍子抜けかも。でも、面白いアイテムだと思う。その世界の時間を表示してくれるなんて。でも、必要ない気がする。あったら面白ってだけだ。

「旅の準備は完了ですね」

会長様が一步前に出る。

「そうですね……。注意事項として、あなた方からの連絡はできません。なにかあっても、なんとか対処してください。救援に行くのは不可能だと思って下さい」

シシミさんが淡々と述べる。

なるほど……。かなりシビアかもしれないな。どうしていいのかわからなくなっても、自分たちでなんとかしないとイケない。戻ってくるのも、終わるまでできそうにない。本当に、いつ終わるのかわからない旅だし、なにが起きるのかわからない。しかも、命懸けときたもんだ。

「トールちゃん」

キヨカが不安そうな顔で、俺のシャツの裾を引っ張る。

「大丈夫さ。俺たちでなんとかしよう」

俺が不安そうにしてたら、キヨカはますます不安になってしまいうだろう。だから、俺はそんな顔をしちゃいけないんだ。内心、不安しかない感じだが。

「なにか質問は？といっても、なにを訊けばいいのかわからないだろうけどな。それでも、もしなにかあるなら今しかないぞ」

そうだな.....。

考えてみるが、椎崎さんの言うとおりに、なにを訊けばいいのかすらわからない。

わからない事だらけなので、質問もわからない。

「まあ、頑張れ。時空の能力者は、男女のペアでのみ世界を移動できる。つまり、二人が揃って

いないと、世界は移動できない。だから、絶対に離れるな。なにがあっても一緒にいるんだ」
ずっと一緒に……か。

二人が揃わないといけない。

もっとも、キヨカを見捨てるわけではないんだが、よくこういう話だと、俺をおいて先に行け！
みたいな展開がありそうだけど、それはできないってわけだよな。

ドラマチックとか別にしても、そういう場面なら言いそうだよな……。

「それでは、大変な旅になると思いますが、宜しくお願いします」

会長様が深々と頭を下げる。

おわっ。なんだか、すっげえ悪い事をしている感じだ。決して、優越感なんてない。

「それじゃ、早速彼女の能力を使ってもらおうか」

唐突に椎崎さんに指名されて、キヨカはポカンとなる。

「おいおい、この旅には必要だぞ。なくても、自然とあるんだが、それを人工的に作れるなら、
これほど便利なものはない」

そう言われても、キヨカはなんの事かわかっていないらしい。不安そうな顔で俺を見る。

「あなたの『時の口』を作る能力(ちから)を使ってみて下さい。使い方は、念じれば大丈夫の
はずですよ」

会長様が優しく説明してくれる。

「……はい」

キヨカは緊張した表情のまま、目を閉じて、う〜んと唸る。

すると、キヨカの前に、ぽっかりと穴が出現した。

キヨカは目を開け、自分が作ったそれをじっと見る。

これで世界を移動できるんだ……。

それを、キヨカが作り出せる。すごい能力だよな。

「おおっ、やっぱり便利だな」

「そうですね」

椎崎さんと会長様が感心しているが、シシミさんはただ立っているだけだ。

「お二人には……あたし意外は全員が見えるのに、一人だけ見えないのは淋しいですね」

えっ？ この人には見えないの？ 能力があるはずなのに。

「しょうがないですよ。時空(とき)の能力者にしか見えませんから」

「それはわかっていますが、やはり淋しいものですよ」

「さあ、宍神さんが淋しがってるみたいだから、得意げに出発しな」

椎崎さんが、悪戯そうな笑みを浮かべる。

「体には気を付けて下さい。お任せしておいて、こういう事を言うのは矛盾していますが、無理
はしないで下さい。自分たちを大切にして下さい」

会長様が、本当に心配そうな表情で言う。

「はい。ありがとうございます」

俺とキヨカは深々と頭を下げる。

「それでは、行ってらっしゃい」

会長様に言われて、俺たちは『時の口』に一步踏み出す。

「行ってきます」」

そして、俺たちはその中に入った。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

心の歌を奏でて 一序章一 ③

<http://p.booklog.jp/book/48883>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48883>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48883>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.